

# 日本通訳翻訳学会 第 19 回年次大会

スケジュール  
交通アクセスと会場案内  
基調講演  
公開シンポジウム  
予稿集

2018 年 9 月 8 日(土)–9 日(日)  
会場 関西大学

## 日本通訳翻訳学会第19回大会スケジュール

開催日:2018年9月8日(土)~9日(日)

会場:関西大学 千里山キャンパス 第3学舎 1号館

第1日(9月8日)

9:45	2階ロビー				受付開始							
10:20 -10:30	301				開会式							
10:30 -12:00	301				<b>特別企画 公開シンポジウム</b> <b>「翻訳におけるテクノロジーを考える」</b> パネラー 井口耕二(翻訳者)、高橋さきの(翻訳者)、藤田 篤(情報通信研究機構)、Chenhui Chu(大阪大学)、宮田 玲(名古屋大学) モデレータ 山田 優(関西大学)							
12:20 -13:00	301				総会							
13:00 -14:00	昼食・休憩				207	評議員会						
	303	A会場		304	B会場		305	C会場		306	D会場	
14:00 -14:30	A-1 A-2「サイトラ研究プロジェクト活動報告」		B-1「翻訳からポストエディットへー産業翻訳における機械翻訳の利用」		C-1「英日翻訳における日本語らしさと必須情報」		D-1 “Acting at/as the cultural borders: professional self-conceptualization of literary translators in Russia”		Elena Baibikov (Kobe City University of Foreign Languages) (司会:松下佳世)			
	石塚浩之(広島修道大学)、稲生衣代(青山学院大学)、辰己明子(広島修道大学)、長沼美香子(神戸市外国語大学)、畑上雅朗(神戸市外国語大学)、山田 優(関西大学)		河野弘毅(ポストエディット東京) (司会:立見みどり)		北村富弘(法務省大阪刑務所国際対策室) (司会:坪井睦子)							
14:40 -15:10			B-2「字幕翻訳におけるニューラル機械翻訳の可能性とその応用」		C-2「日本における韓国絵本翻訳—『天女かあさん』を題材に—		D-2 “A short comparison of the translation style of Aeneid II between Friedlich von Schiller and William Wordsworth”		高畑時子 (Kindai University Technical College) (司会:松下佳世)			
			平岡裕資(関西大学M) (司会:立見みどり)		尹 惠貞(一橋大学D) (司会:坪井睦子)							
15:20 -15:50	A-3「通訳利用のメリットとデメリットの比較考察—日英ビジネス通訳の事例をとおして—」		B-3「連体修飾節と被修飾節の意味関係から見る日本語内容節の翻訳アプローチ—機械翻訳を中心に—」		C-3「アラビア語放送通訳のストラテジーとその手法に関する考察—アルジャジーラニュースの放送通訳を事例に—」		D-3 (ポスター発表準備)					
	高橋絹子(上智大学)、木村護郎クリストフ(上智大学) (司会:石塚浩之)		谷 文詩(筑波大学D) (司会:立見みどり)		上川アルモーメンアブドーラ(東海大学) (司会:坪井睦子)							
15:50 -16:30	休憩											
	D会場(306)ポスター発表											
	P-1「英語文学、その邦訳、並びに映画化に見られる「視点」の変容—カズオ・イシグロの <i>The Remains of the Day</i> を題材に—」 加藤久佳(愛知工業大学) P-2「同時通訳における訳出遅延の短縮に有用な訳出方略の獲得の効率化」 蔡 仲熙(名古屋大学)、笠浩一朗(三重短期大学)、松原茂樹(名古屋大学) P-3「通訳実務者、研究者の国際学会 Critical Link International」 津田 守(名古屋外国語大学)、水野真木子(金城学院大学)、毛利雅子(豊橋技術科学大学)、岡部純子(大阪大学)、大野直子(順天堂大学)											

P-4 「複数の報道機関による「板門店宣言」の全訳について」 申 周和(立教大学 D)
P-5 「解釈学の視点から見た伊藤漱平「好了歌」の翻訳研究」 吳 珺(中国北京語言大学)

	303 A会場	304 B会場	305 C会場	306 D会場
16:40 -17:10	A-4 「警察での事情聴取時の通訳人による法廷証言と説明責任: 米国の判例分析に基づく考察」 田村智子(国際基督教大学) (司会: 吉田理加)	B-4 「対話通訳における通訳者のトラブル修復についての考察—新生児訪問模擬通訳の会話分析から—」 飯田奈美子(立命館大学) (司会: 内藤 稔)	C-4 C-5 「日本の通訳翻訳史」研究プロジェクト成果報告—近世の通訳翻訳者をめぐって」 佐藤美希(札幌大学)、古川弘子(東北学院大学)、田中深雪(青山学院大学)、齊藤美野(順天堂大学)、坪井睦子(順天堂大学)、平塚ゆかり(順天堂大学)、長沼美香子(神戸市外国語大学)、北代美和子(翻訳家・東京外国語大学)、南條恵津子(神戸女学院大学)	D-4 「通訳初学者が生じる誤りの経時的変化の分析」 田中加英美(フリー研究者)、田辺希久子(フリー翻訳者)、藤田 篤(情報通信研究機構) (司会: 水野 的)
17:20 -17:50	A-5 「言語権から見る司法通訳人の存在と意義—アメリカに見る言語意識と実施例」 毛利雅子(豊橋技術科学大学) (司会: 吉田理加)	B-5 「手話通訳者は日本手話音節の不適格性をどの程度認識できるか」 原大介(豊田工業大学)、米田拓真(豊田工業大学)、中野聡子(大阪大学) (司会: 内藤 稔)		D-5 「学習者がプロ翻訳者に近づくには?—プロ翻訳者と学習者の翻訳プロセス比較」 大西菜奈美(関西大学M) (司会: 水野 的)
18:15 -20:15	キャンパスレストラン Circolo (チルコロ)  <b>懇親会</b> ※懇親会会費(一般 4,000 円 学生 3,000 円)は当日、受付でお支払いください。			

第 2 日(9 月 9 日)

	303 A会場	304 B会場	305 C会場	306 D会場
9:30 -10:00	A-6 A-7 「日本における通訳者のキャリア開発プロセス実態調査」プロジェクト報告」 石黒弓美子(清泉女子大学)、板谷初子(北海道武蔵女子短期大学)、新崎隆子(東京外国語大学)、西畑香里(東京外国語大学)	B-6 「通訳と翻訳の一体化する教育モデルの探索について」 龐 焱(中国広東外語外貿大学) (司会: 田辺希久子)	C-6	D-6 「置換訳」と「翻訳」による英文再生度の違い」 守田智裕(名古屋市立向陽高等学校) 石原知英(鹿児島大学) (司会: 佐藤美希)
10:10 -10:40		B-7 「文化財説明文における語句の平易化方法: 翻訳ストラテジー類型との比較分析」 宮田 玲(名古屋大学)、立見みどり(立教大学) (司会: 田辺希久子)	C-7 「英文和訳における「増訳」に関する研究—The Great Gatsby の英語原著と日本語訳の比較を通して」 趙 洋(大阪大学 D) (司会: 長沼美香子)	D-7 「英語教育における翻訳の意義と役割 —TILT 研究の論点整理—」 石原知英(鹿児島大学) 守田智裕(名古屋市立向陽高等学校) (司会: 佐藤美希)
10:50 -11:20	A-8 「通訳ワークショップ—満足度や達成感をさらに高めるための学生からの視点の導入」 山崎美保(会議通訳者、関西大学、神戸女学院大学) (司会: 瀧本真人)	B-8 B-9 「プロの通訳者による実現場でのパフォーマンス・データを活用した通訳コーパスの構築とその応用可能性」 松下佳世(立教大学)、山田 優(関西大学)	C-8 「ヒエロニムスとルフィヌスの翻訳論争: オリゲネス『諸原理について』をめぐって」 加藤哲平(日本学術振興会特別研究員 PD/京都大学) (司会: 長沼美香子)	D-8 「日本人英語学習者の「ことばへの気づき」を促す訳タスクに関する研究—タスクとしての「訳注」に着目して—」 水島祐人(広島大学 M) (司会: 佐藤美希)
11:30	A-9 「プロ通訳者による逐次通訳と同時通訳に関する比較研究」		C-9 「翻訳語をめぐる憲法学と国際政治学—国権と国益の概念」	D-9 (ポスター発表準備)

-12:00	董 海濤(杏林大学 D) (司会:瀧本真人)		大山貴稔(東京福祉大学)、河原清志(関西大学) (司会:長沼美香子)	
12:00 -13:45	昼食・休憩  D会場(306)ポスター発表 P-1 「英語文学、その邦訳、並びに映画化に見られる「視点」の変容—カズオ・イングロの <i>The Remains of the Day</i> を題材に—」 加藤久佳 (愛知工業大学) P-2 「同時通訳における訳出遅延の短縮に有用な訳出方略の獲得の効率化」 蔡 仲熙 (名古屋大学)、笠浩一朗 (三重短期大学)、松原茂樹 (名古屋大学) P-3 「通訳実務者、研究者の国際学会 Critical Link International」 津田 守(名古屋外国語大学)、水野真木子(金城学院大学)、毛利雅子(豊橋技術科学大学)、岡部純子(大阪大学)、大野直子(順天堂大学) P-4 「複数の報道機関による「板門店宣言」の全訳について」 申 周和(立教大学 D) P-5 「解釈学の視点から見た伊藤漱平「好了歌」の翻訳研究」 吳 瑤(中国北京語言大学)		207 理事会	203 「院生フォーラム」 院生有志による自主セッション (司会:ベンチャラット・スツカスイ)
	303 A会場	304 B会場	305 C会場	306 D会場
14:00 -15:30	301 <b>基調講演</b> 「コンピュータによる自動通訳を目指して」 中村 哲(奈良先端科学技術大学院大学教授) 司会 山田 優(関西大学教授)			
15:40 -16:10	A-10 「クライアントが見た「通訳者という存在」—国際教育音楽祭関係者へのインタビュー分析」 熊谷ユリヤ (札幌大学) (司会:河原清志)	B-10 「ブルデュー「文化資本」の観点から通訳者の社会的地位を考える:ISO 17100:2015の導入をめぐる」 齋藤百合子(立教大学) (司会:藤濤文子)	C-10 「中国語を母語とする熟達度の高い上級日本語学習者の日中口頭通訳過程:復唱課題と口頭通訳課題を用いた実験的検討をもとにして」 楊 潔氷(広島大学 D) (司会:古川典代)	D-10 「日本の高校で字幕翻訳を活用した授業を実施した際に見られる生徒への影響—学習に対する意識と学力の変化に着目して—」 高田 愛(関西大学 M) (司会:田中深雪)
16:20 -16:50	A-11 「日越間ビジネス通訳者の逸脱行為—半構造化インタビューとM-GTAを用いて—」 TRAN THIMY(東京外国語大学 D) (司会:河原清志)	B-11 「通訳案内士制度の変遷について—「通訳」を含む通訳案内士の業務に注目して—」 佐藤 道(金城学院大学 M) (司会:藤濤文子)	C-11 「実践報告—日中大学間における通訳教育交流プラットフォームの構築にむけて」 平塚ゆかり(順天堂大学)、吳瑤(北京語言大学) (司会:古川典代)	D-11 「翻訳コンピテンスとは何か、それはどのように規定されているか:翻訳教育カリキュラム開発に向けたレビュー」 朴 惠(東京大学 D)、影浦 峯(東京大学) (司会:田中深雪)

- 研究発表は、発表 20 分＋質疑応答 10 分です。質問は発表内容に直接関連したことについてのみ、手短に行うものとします。質問者の単なる意見の陳述はご遠慮ください。
- 各発表間の 10 分間は、出入室のための時間です。移動はすみやかにお願いします。
- 発表スケジュールにある (M)・(D) は、それぞれ発表者が博士前期課程(修士課程)、博士後期課程の学生会員であることを示します。

- 307教室は書籍展示・休憩室として開放しています。ご自由にご利用ください。

大会期間中は学内の無線 LAN にアクセスできます。ご利用希望の方は受付でお訊ねください。Eduroam は利用できます。

発表者の皆さんへ:

- 研究発表で使用する教室には、プロジェクタに接続された PC (Windows 7) が用意されています。PC には PowerPoint 2013 がインストールされていますので USB メモリ等でデータをご持参ください。機材をご自身で持ちこんでいただいても構いませんが、その際には、必要となるケーブルのご準備も合わせてお願いします。
- PC 等の不具合に備えて、配布資料のご準備を推奨しています。ご自身で必要部数(40 部程度)をご準備いただき、当日ご持参ください。教室での配布については、必要に応じて会場スタッフがお手伝いをいたします。
- ポスター発表で掲出するポスターは、各自で印刷したものを当日ご持参ください。掲示スペースは、可搬式ホワイトボード(板面:縦 860mm × 横 1160mm、A0 サイズ横向き)1 枚相当のスペースです。
- 発表の内容に関して、個人情報や守秘義務、二重投稿／二重発表、無断引用などには十分ご留意ください。

[第 19 回年次大会実行委員会]

山田 優(関西大学／大会実行委員長)、大久保友博(京都橘大学)、河原清志(関西大学)  
高橋絹子(上智大学)、豊倉省子(関西大学 D)、長沼美香子(神戸市外国語大学)、  
古川典代(神戸松蔭女子学院大学)

[プログラム委員会]

坪井睦子(順天堂大学／委員長)、武田珂代子(立教大学／副委員長)

## 交通アクセス

会場：関西大学 千里山キャンパス



関西大学 千里山キャンパス

(大阪府吹田市山手町 3 丁目 3 番 35 号)

会場は千里山キャンパス「第 3 学舎」になります。地図中の 3-1 の建物です。  
(プレカンファレンスは「100周年記念館 ホール」地図中の 44 の建物です。)

詳しい地図はこちら

<http://www.kansai-u.ac.jp/global/guide/access.html#senri>

○阪急電鉄

「関大前」駅下車 徒歩約 5 分。

○JR 利用の場合

「JR 吹田北口」停留所から「関西大学」停留所下車 (この間約 7 分・25 分間隔で運行)、徒歩約 7 分。

第2日(9月9日) 14:00-15:30

301 教室

## 基調講演

### 「コンピュータによる自動通訳を目指して」

中村 哲 (奈良先端科学技術大学院大学教授)

#### 要旨

元の言語で発話された音声に対し、音声認識、機械翻訳、音声合成をリアルタイムで行い、別の言語の音声で出力する技術を「音声翻訳」と呼び、研究開発を行ってきた。この技術の研究開発は、1980年代から始まり、多くの研究者の研究成果が結実して、現在、日常旅行会話の「音声翻訳」が実用化段階に入っている。異なる言語を話す世界の人々とのコミュニケーションを可能とし、グローバルビジネスや異文化交流、ランゲージデバイドの解消などに資するものとして期待されている。

しかし、実際にこのような場面で期待されているのは、「翻訳」というより「通訳」ではないだろうか。これまでの音声翻訳は、書き言葉を単語列として処理する機械翻訳をベースに前後に音声認識部と音声合成部を付与した技術であり、同時通訳も内容理解も行わないため、あえて「音声翻訳」としていた。言うまでもないが、テキストを対象とし読み書きに多くの時間を使うことができるオフラインの翻訳と、音声を対象にその場で意図を伝え、理解するリアルタイムの通訳は異なっている。本稿では、これまで行ってきた「自動音声翻訳」研究について紹介し、現在、筆者らが行っている、「自動音声通訳」へ向けた、同時音声通訳、強調・感情などを伝える音声通訳、音声画像翻訳などの研究について紹介する。特に、現在、検討中の同時通訳コーパスの設計、収集計画、研究アプローチについて紹介し、JAITSの皆様との今後の共同研究の可能性について議論したい。

#### プロフィール

京都大学博士(工学)。シャープ株式会社、1994年奈良先端科学技術大学院大学助教授、2000年ATR音声言語コミュニケーション研究所室長、所長、2006年情報通信研究機構研究センター長、けいはんな研究所長などを経て、2011年より奈良先端科学技術大学院大学教授。ATRフェロー。カールスルーエ大学客員教授。AAMT長尾賞、情報処理学会喜安記念業績賞、総務大臣表彰、文部科学大臣表彰、日本ITU協会国際協力賞、Antonio Zampoli賞受賞。IEEE SLTC委員、ISCA理事、IEEE Fellow、情報処理学会フェロー。2005年から音声翻訳に関する研究プロジェクトを主導し、音声認識・合成技術、言語翻訳技術などの要素技術を進展させ、音声翻訳システムの実用化に貢献した。現在は、自動同時通訳、自動対話制御、コミュニケーションにおける脳機能計測、自閉症などコミュニケーション障がい者の対話システムによる教育など、幅広く、話し言葉によるコミュニケーションとはなにか、コンピュータによりどのような支援ができるか、どこまで代替できるかについて研究している。

司会

山田 優(関西大学)



第 1 日(9 月 8 日) 10:30-12:00

301 教室

## 特別企画 公開シンポジウム

「翻訳におけるテクノロジーを考える」

パネラー 井口耕二(翻訳者)  
高橋さきの(翻訳者)  
藤田 篤(情報通信研究機構)  
Chenhui Chu(大阪大学)  
宮田 玲(名古屋大学)

モデレータ 山田 優(関西大学)

### 要旨

世の中には膨大な翻訳の需要があるが、実際に翻訳がなされているのはそれらの 1%にも満たない。近年のニューラル機械翻訳(NMT)の進歩をふまえ、国内外におけるポストエディットなどの実用化も進んでいるが、さらに増え続ける需要をまかなうには、翻訳者とテクノロジーが協働/共存する方法を模索することが不可欠である。現代の、そして近未来の翻訳者にとって、どのようなテクノロジーが真に有用たりうるか?その実現に向けて、翻訳者と技術系研究者はどのように協働できるか?

本シンポジウムでは、これらについて真剣に議論するため、まず翻訳者の潜在的ニーズを発掘し、技術系研究者のシーズを共有する。それらをふまえた議論を行い、真に有用なテクノロジーを創出する契機としたい。

### ■実務翻訳者からの話題提供

#### 井口耕二「翻訳者と機械の役割分担 — 翻訳者の立場から」

2 万行近いプログラムを組んで翻訳用のツールを自作するなど、翻訳作業の現場で 20 年以上、機械と人間のベストな関係を模索してきた経験をもとに、機械にさせるべき作業と人間が行うべき部分はどこで切り分けるのか、なにを機械にしてほしいのか、機械になにをさせると足を引っぱられるのか、また、なぜそういうことになるのかなどを指摘する。

#### 高橋さきの「マン・マシン・インタフェース — 翻訳の場合」

翻訳者たちは常に、その時代のテクノロジーと共存するかたちで仕事をしてきた。紙と鉛筆しかり、タイプライターしかり、パソコンや各種の市販ソフトウェアやフリーウェア・シェアウェアしかり。問題は、どのようなテクノロジーとどのように共存するかである。紙と鉛筆の時代と、パソコン登場以降のちがいは、後者がプログラマブルな存在で、使い手と機械とのインタフェースが複数化して動く存在となったことだろう。今回は、ふだんの仕事の進め方にも言及しつつ、議論の深化をはかりたい。

## ■言語処理研究者からの話題提供

### 藤田 篤「機械翻訳ができそうなこととできないこと」

対訳データの集積とコンピュータの処理能力の向上によって機械翻訳(MT)の性能は急速に向上している。MTの基本的な仕組みについて概説した後、ニューラルMTによって可能になった多言語MTやマルチモーダルMTなどの発展形を紹介する。一方で、MTの限界について事例を交えつつ述べ、その一部を効率的に回避する方法として、単言語コーパスからの対訳知識の自動獲得、ポストエディットの自動化、品質の自動推定などの処理について紹介する。

### Chenhui Chu「ニューラル機械翻訳における分野適応の最先端」

深層学習に基づくニューラル機械翻訳は大規模な対訳コーパスが入手できる場合に最先端の翻訳精度を達成した。翻訳業界では高品質な特定分野の翻訳が求められるが、特定分野の対訳コーパスが大量に存在しない場面が数々ある。分野適応は他分野の対訳コーパスや単言語コーパスを利活用することによって特定分野の翻訳品質を向上させる技術である。本発表では、ニューラル機械翻訳における分野適応の最先端技術を紹介する。

### 宮田 玲「プリエディットによる機械翻訳活用の試み」

プリエディットとは、機械翻訳の前工程において翻訳精度の向上を目指して起点テキストを書き換える作業である。機械翻訳の後工程に位置するポストエディットと対になる概念として説明されることが多いが、言語操作上の具体的な手法や現実の作業で求められる知識・技術について十分整理されていない。本発表では、実務者と研究者の協働を見据えて、プリエディットの概念や要件を検討した上で、人手によるプリエディットの試行実験から得られた知見を共有する。

## プロフィール

### 井口耕二

東京大学工学部卒、米国オハイオ州立大学大学院修士課程修了。1998年に石油会社を退職し、翻訳者として独立。技術・実務の翻訳からビジネス書を中心とする出版翻訳まで幅広くカバーする。主な訳書に『スティーブ・ジョブズ』（講談社）、『スティーブ・ジョブズ 驚異のプレゼン』（日経BP社）、『リーダーを目指す人の心得』（飛鳥新社）など、単著に『実務翻訳を仕事にする』（宝島新書）、共著に『翻訳のレッスン』（講談社）がある。翻訳フォーラム共同主宰。

### 高橋さきの

1984年に東京大学農学系研究科修士課程を修了後、特許事務所を経て1987年独立。以来、日英・英日の特許翻訳と科学系書籍の翻訳に従事。共著は『プロが教える技術翻訳のスキル』『翻訳のレッスン』（講談社）、『リーディングス戦後日本の思想水脈』（岩波書店）、『[新通史]日本の科学技術 第3巻』（原書房）など多数、訳書はシルヴィア『できる研究者の論文生産術』『できる研究者の論文作成メソッド』（講談社）、ハラウェイ『猿と女とサイボーグ—自然の再発明』『犬と人が出会うとき—異種協働のポリティクス』（青土社）などがある。翻訳フォーラム共同主宰、お茶の水女子大学大学院非常勤講師。

### 藤田 篤

2005 年奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了。博士(工学)。ポスドク、大学教員を経て、2014 年より情報通信研究機構・主任研究員。専門は計算言語学、自然言語処理。主に言い換え技術と機械翻訳の研究に従事。完璧たりえない各種技術をそれでも活用する方法に思いをめぐらせつつ、現在は特に、単言語コーパスからの対訳知識獲得、翻訳品質の自動推定の研究と技術開発に注力している。

### Chenhui Chu

2008 年重慶大学ソフトウェア工学部卒業。2012 年に京都大学大学院情報学研究科修士課程修了。2015 年同大学院博士課程修了。博士(情報学)。日本学術振興会特別研究員 DC2、国立研究開発法人科学技術振興機構研究員を経て、2017 年より大阪大学データビリティフロンティア機構特任助教。機械翻訳、自然言語処理の研究に従事。言語処理学会、人工知能学会、ACL、各会員。

### 宮田 玲

東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士(教育学)。専門は図書館情報学・自然言語処理。在学中に情報通信研究機構にて機械翻訳応用に関する研究に従事。現在は、名古屋大学工学部/大学院工学研究科(情報・通信工学専攻)助教。理解しやすい情報提示のための文書構造の設計と読みやすく・翻訳しやすい日本語表現の解明に取り組んでいる。最近の研究テーマは、文書オーサリング支援システムの開発、対訳用語集の構築・評価など。

1 日目 A 会場 (303) 14:00 – 15:10

A-1 A-2

### サイトラ研究プロジェクト活動報告

石塚浩之(広島修道大学)、稲生衣代(青山学院大学)、辰己明子(広島修道大学)、長沼美香子(神戸市外国語大学)、畑上雅朗(神戸市外国語大学)、山田 優(関西大学)

本発表はサイトラ研究プロジェクト(2015–2017)の活動報告である。今年度は、メンバーがそれぞれの関心でサイト・トランスレーション(以下、サイトラ)の研究を進めた。本発表では、それぞれの研究の概要をオムニバス形式で報告する。

1. 「**サイトラの認知プロセス：分割について**」本研究ではサイトラに必要な認知プロセスを分割・保持・組換えの3段階に分けて考える。今回は、このうち分割に焦点を当てる。サイトラを可能とする順送りの訳出のためには、起点テキストから得る情報を訳出可能な断片に分割する必要がある。本発表ではその認知的側面として考察すべき点を指摘する。(石塚)
2. 「**サイトラ・プロセスの予備的分析**」本研究は、英語と日本語という統語構造が大きく異なる言語ペアにおけるサイトラのプロセスに関するデータを、実証研究の手法を用いて収集して分析することを目指す。今回はパイロット・スタディとして、通訳翻訳を学ぶ大学院生によるサイトラの音声とアイトラッキングのデータを収集した。さらに、典型的な順送り訳と逆送り訳を比較して、サイトラのパフォーマンスにどのような差異が見られるかを検証した。(長沼・山田)
3. 「**放送通訳とサイトラ**」会議通訳におけるサイトラの典型は、話し手が原稿を用意し読み上げた場合に、通訳者が原稿を追い頭から順送りを意識しながら同時に訳していくというものだ。話者が原稿から大幅に離れなければサイトラの技術を直接活用できる。一方、放送通訳では順送りの訳出をするには制約も多い。それはなぜかを明らかにするとともに、サイトラ技術を有効活用する方法を考えてみたい。(畑上)
4. 「**サイトラの実践：ニュースの文字情報の訳出**」テレビ・ニュースの通訳では、音声だけでなく、文字情報が訳出される場合があり、同時通訳で訳出される場合は文字情報を瞬時にサイトラするスキルが求められる。本発表では文字情報の訳出についての考察を行う。(稲生)
5. 「**サイトラを用いたリーディング指導実践**」英文和訳を用いたリーディング指導に関する先行研究においては、学習者が英語の語順に沿って英文を読むことができないなど、学習者が抱える問題が指摘されている。このような問題への対応として、サイトラを用いた指導が提案されているが、その効果に関する研究は十分になされていない。本発表では大学生を対象に実施したサイトラ指導の実践とその結果を紹介する。(辰己)

### 【参考文献】

長沼美香子・船山仲他・稲生衣代・水野的・石塚浩之・辰己明子(2016)「サイト・トランスレーション研究の可能性」『通訳翻訳研究への招待』16:142-162

1 日目 A 会場 (303) 15:20 – 15:50

司会 石塚浩之

A-3

通訳利用のメリットとデメリットの比較考察—日英ビジネス通訳の事例をとおして—

高橋絹子(上智大学)、木村護郎(上智大学)

現在、日本では、企業の「英語公用語化」が話題になる一方で、通訳の需要も伸びているといわれている。しかし、コミュニティー通訳や会議通訳に比べて、ビジネス通訳に関しては、全般的に研究があまり進んでいない。とりわけ、英語を直接使う場合と比べた通訳利用の長所短所については、体系的な考察がなされていない。通訳と共通語としての英語の使い分けに関する先行研究(高橋・木村 2017)で副次的にとりあげた、通訳者からみた通訳のメリットをふまえて、本研究では、日英ビジネス通訳の事例をとおして、ビジネス場面で通訳を使うメリットとデメリットの比較検討を行い、通訳という手段の意義と限界について理解をふかめる一助としたい。

そのため、通訳という手段のメリットとデメリットに関して、通訳者 13 名および顧客 8 名にインタビューを行うとともに、大学生 111 名にアンケート調査を行った。まず現場を知る通訳者と顧客の観点を対比させたうえで、通訳の一般的なイメージと比較すべく、学生の回答とつきあわせて考察する。通訳者からは、「言語の違いをこえたコミュニケーションが可能になる」といった基本的なメリットのほか、「(顧客の)認知機能の負担の軽減」などがあがり、顧客からは、他者に通訳を委譲できる「相互行為の分担」などが報告された。言語を置き換えて意思疎通をはかるといふ通訳の原義をこえたこれらのメリットについては、通訳者と顧客という立場の違いが異なる気づきをもたらしていると考えられる。一方、デメリットとしては、双方から、時間がかかるという問題や専門的な内容理解の問題があげられたが、これらの点は、「時間稼ぎ」や「より円滑かつ正確なコミュニケーション」というメリットとしてあげられた点と裏表の関係にある。大学生のアンケートからは、外国語を学ぶ必要がないことなど、さらなる指摘が付け加わったが、ここでも同一項目がメリットとしてもデメリットとしてもあげられた。

これらの異なる観点からの報告をふまえて、本研究では、通訳という媒介手段のもつ同一の特徴がメリットにもデメリットにもなるという前提にたつて、インタビューおよびアンケートであげられた諸項目を体系的に整理・分類する。そのうえで、デメリットを小さくしてメリットを大きくする通訳の活用法について考察する。

1 日目 A 会場 (303) 16:40 – 17:10

司会 吉田理加

A-4

**警察での事情聴取時の通訳人による法廷証言と説明責任: 米国の判例分析に基づく考察**

田村智子 (国際基督教大学)

公の場で行われる裁判とは異なり、非公開の「密室」で行われる警察の事情聴取において被疑者が通訳人を必要とした場合、その通訳の正確性・中立性をいかに担保・検証するかは、日本を始め多くの国が模索し続けている難問である。他国に先駆け 1978 年に「法廷通訳人法 (Court Interpreter Act)」を制定しその資格制度を確立した米国でさえ、事情聴取段階での通訳人に関しては「手話通訳」を除き連邦レベルでも州レベルでも立法府による明確な資格規定は未だ無い。よって建国以来現在に至るまで、司法が判例法という形で「伝聞排除」に基づく適正手続として最低限保証されるべき事情聴取段階での通訳の正確性・中立性の基準を示してきた。1960 年代以降要通訳事件の爆発的な増加に伴い、『『代理人かつ導管である通訳人』を介した供述は非伝聞なので通訳人による法廷証言は必要無し』とする判例法が主流にはなったが、近年「伝聞排除」の再厳格化に伴い、事情聴取時の通訳人の法廷証言は必須であるとする判決も州や巡回区レベルで出始めている。

「伝聞排除」の原則では、事情聴取時の通訳人に法廷でどのような証言が求められるのであろう。事情聴取を行った刑事の証言が「伝聞」となるなら、通訳人は刑事に代わって被疑者の供述内容に関する証言を求められるのであろうか。果たしてそのようなことが可能なのだろうか。また司法通訳人の倫理規定である「中立性」や「守秘義務」と警察及び検察側の証人として証言することとはどのように折り合いがつくのだろうか。以上の問いに関し、建国以来 2017 年までの米国の全控訴審判決を以下の観点からデータ分析を行った。

- 1) 建国以降現在までの刑事事件における事情聴取時通訳人による法廷証言有無の推移
- 2) 通訳人有証言時の証言内容と被疑者供述の証拠採用の有無
- 3) 民間通訳人と警官通訳人 (警察職員による通訳) に関し、対応言語 (特に希少言語等)、通訳人による法廷証言の有無、及び具体的な証言内容の詳細に関する違い

分析結果に基づく考察を述べたうえで、1) 可視化は通訳人が「中立性」や「守秘義務」を順守するためにも不可欠であること、また 2) 専門的資格制度が確立されている法廷通訳同様、事情聴取時の通訳人に関しても今後はよりその専門性 (専門的訓練) と訳出に関する説明責任を果たすための専門的知識が問われる時代になる、との見解を示したい。

1 日目 A 会場 (303) 17:20 – 17:50

司会 吉田理加

A-5

### 言語権から見る司法通訳人の存在と意義—アメリカに見る言語意識と実施例

毛利雅子(豊橋技術科学大学)

法廷通訳人、または司法通訳人に関するシステムや法令は、歴史的に移民や難民受け入れが行われてきた欧米諸国では必要に応じて、または必要に迫られて制定されているところが多い。例えばアメリカでは、Court Interpreters Act (1978)に始まる法律やその後の修正、さらには Court Interpreters Guidance が設定されている。また欧州では、欧州統合や欧州連合の発足に伴い、EU Directive2010/64 や Eulita が設定され、EU 加盟国はこれに基づいた各国の法律を制定している。

世界で起こっている難民問題を含む国際政治の状況、グローバル化する経済活動を鑑みれば、日本に入ってくる外国人の数、また外国人が関係する犯罪数は多少の変動はあっても、大きく減少する、もしくはゼロになることはないであろう。加えて、2019 年開催予定のラグビーワールドカップ、2020 年開催予定の東京オリンピックを見据えれば、直接関係せずとも、在日外国人、来日観光客が関わる可能性も有り得る犯罪事案も派生することは十分想定できる。ところが、過去に諸外国から批判を浴びながらも、日本では依然として司法通訳人制度は制定されておらず、通訳人の能力や教育についても大きく論じられることがないままになっている。更にこの問題の本質を鑑みると、他言語に対する意識、日本語を解さない人々に対する言語権の意識の希薄さが存在していることが伺われる。これは、日本がこれまで移民を受け入れてこなかったこと、難民条約を批准していても実際に受け入れられてきた「難民」は非常に少ないこと、また日本国内では「日本語」のみの使用で日常生活が可能になっており、他言語に対する意識、また他言語話者の権利に対する意識を持つ必要がない、もしくはそもそも意識しない環境にあることが考えられる。

この現状を踏まえ、発表者は日本の置かれている現状を見直すと共に、司法通訳人制度を通して見分される言語権と言語に対する意識に注目し、言語権という観点から見る司法通訳人の存在意義を論じたい。

2 日目 A 会場 (303) 9:30 – 10:40

A-6 A-7

**「日本における通訳者のキャリア開発プロセス実態調査」プロジェクト報告**

石黒弓美子(清泉女子大学)、板谷初子(北海道武蔵女子短期大学)、新崎隆子(東京外国語大学)、西畑香里(東京外国語大学)

この発表は「日本における通訳者のキャリア開発プロセス実態調査」プロジェクト(新崎隆子(代表)、石黒弓美子、板谷初子、高橋絹子、西畑香里)が2017年に実施した質問紙調査の結果の報告である。

日本において通訳関連科目を開講している大学の数は多く、学生の通訳に対する興味や関心も高い。しかしながら、日本国内で活躍するプロ通訳者の実態について学術調査がこれまでほとんど行われていないのが現状である。どうすれば通訳者になれるのかを含め学生が持つ疑問や問いに対して、個人的な経験やエピソードのみにとどまらず、調査データに基づき現状を理解した包括的な助言ができる講師は多くないと考えられる。

当プロジェクトの目的は、日本におけるプロ通訳者が、どのような教育や訓練を受けて技能を習得し、どのようにしてプロ通訳者として稼働するに至ったのかの過程を明らかにし、将来プロ通訳者を目指す人たちのためのキャリア開発指導に役立てることができるような指針を見いだすことである。そのための手段として、日本国内外で稼働するプロ通訳者を対象に質問紙調査を実施した。

大きな調査項目は、1. プロフィール(年齢、性別、居住地、デビューした時期、通訳歴、通訳言語、英語の資格、通訳の種類、主な仕事の分野)、2. 通訳になるまでのプロセス(きっかけ、通訳者になりたいと思った年齢、通訳する外国語や通訳技術の習得、経済的自立ができるまでの年数)、3. プロ通訳者としての就業状況(就業形態、雇用形態、稼働状況、時間当たりの平均報酬)、4. 通訳の仕事をする上で直面している問題(家庭の事情、健康管理、ストレス、仕事の獲得量など)、5. 通訳の仕事に対する満足度の5つで、6つ目に自由記述欄を設けた。質問紙を送付した通訳者216人の内199人から回答を得ることができ、回収率は91.3パーセントであった。質問紙回収後はプロジェクトメンバーで手分けをしてデータ入力を行い、データから見えてきたもの、今後さらに深掘りしていきたい点などについての話し合いを重ねてきた。第1回目となる今回のプロジェクト報告では、プロジェクトの概要、調査実施の手順、データ内容、今後の方向性についての発表を行うものとする。



2 日目 A 会場 (303) 10:50 – 11:20

司会 瀧本真人

A-8

### 通訳ワークショップ—満足度や達成感をさらに高めるための学生からの視点の導入

山崎美保(会議通訳者、関西大学、神戸女学院大学)

前回の「通訳ワークショップ」授業実践報告では、Project Based Learning による学生のモチベーションの維持、及び学生が自分のパフォーマンスに対して講師やお互いからフィードバックを受け、その後録音を聞き、改善点に自発的に気づくというサイクルの確立が学生の成長をもたらしたという結論に至った。限られた時間の中で、学生に自主的に動くよう仕向け、達成感を持たせることにより、結果として高い満足度や通訳スキルアップにつながるという流れが確認できたのだが、さらに学生の達成感及び満足度を上げるための方略として、前回からの反省に立ち、今回はフォーカスを絞り、実際の学生側からの視点も授業展開に盛り込むこととした。つまり、前回までは教える側からの本授業目標遂行のための方略を、学生の反応も確認しながらではあるが、ある意味一方方向で実行してきたが、今回は学生の視点から見た、目標達成のためにすべきこと、できていなければならないこと等を取り込むことで新たなアプローチを模索した。そこで、本授業の到達目標である、「逐次通訳の基本的なスキルを習得するとともに、特に専門的でない内容の素材について『ほぼ十分な』レベルで英日・日英逐次通訳ができるようになること」及び「英語と日本語の双方にわたる高度な言語運用力及びコミュニケーション能力を身に付けること」を学生からの視点に合わせて具体化し、「就職活動等の場で自分は一般的な通訳ならできると自信をもって言える」「公式な場にふさわしい、フォーマルな日本語及び英語を習得する」ためには何ができたらいいのか、そのために授業に何を求めるのかというリサーチクエスチョンとして学生に提示した。現時点では、前者に関しては「丁寧な日本語を英語に転換する力」、「毎授業後の録音を聞き直して、自分の訳出と講師の訳出を近づけていき、最終的に自分の訳出を聞いて『これなら通じる』と思った時、自信を持てると思う」などの声、また後者に関しては「フォーマルな表現を学び、使用したいが、そのような場がなかなかないのが悩みだ」などの声が出ており、これらを具体的示唆として順次授業に織り込んでいる。今回の発表では、これらのデータをジルの努力モデルなど、学説的な観点から俯瞰し、学生側から見た目標達成の目安を盛り込んだ授業展開について論じ、フロアの皆様からもご意見を頂戴し、今後の通訳教授法の考察に生かしたいと考える。

2 日目 A 会場 (303) 11:30 – 12:00

司会 瀧本真人

A-9

### プロ通訳者による逐次通訳と同時通訳に関する比較研究

董 海濤(杏林大学国際協力研究科博士後期課程)

逐次通訳と同時通訳はよく使われる通訳形態である。日本では、通訳報酬は通訳形態ではなく、通訳会社に登録されている通訳者のランクによって決まるが、東日本大震災をきっかけに日中同時通訳が注目されるようになった中国では、通訳者をランクづける通訳会社が少なく、同じ通訳者であっても、逐次通訳より同時通訳の報酬が高いことが現状であり、同時通訳が逐次通訳より優れているという誤解がある。時間の節約を理由に、同時通訳を強要される社内通訳の経験を問題意識に、プロ通訳者を対象に逐次通訳と同時通訳の訳出に関する比較研究を試みる。

原発言の難易度によっては、比較結果が異なる可能性があると考えられ、本研究では、日本記者クラブホームページに公開された講演動画3本を実験材料とする。また、日本語文章難易度判別システムを使ってリーダビリティ・スコアを算出し、さらに、話速、情報密度を根拠に材料の難易度を高、中、低と定義する。

また、通訳者によっては、比較結果が異なる可能性があると考えられ、本研究では、材料1、2、3を前半と後半に分けて、グループ1に逐次通訳と同時通訳、グループ2に同時通訳と逐次通訳を実施してもらい、その録音を書き起こして、研究の基礎となるコーパスを構築する。

発表では、同じ材料に対するプロ通訳者同士による逐次通訳と同時通訳の比較、難易度が近いと考えられる同じ材料の前半と後半についての同じ通訳者による逐次通訳と同時通訳の比較という二つの視点から分析を行う。

#### 【参考文献】

フランツ・ポエヒハッカー(2008)通訳学入門 鳥飼玖美子監訳 みすず書房

Daniel Gile (2001) Consecutive vs. Simultaneous: Which is more accurate? 『通訳研究』第1号 日本通訳翻訳学会

白燕飛 2003 试比较交替传译与同声传译(英-汉)的准确性 北京外国语大学修士論文

2 日目 A 会場 (303) 15:40 – 16:10

司会 河原清志

A-10

### クライアントが見た「通訳者という存在」- 国際教育音楽祭関係者へのインタビュー分析

熊谷ユリヤ(札幌大学)

本発表は、国際教育音楽祭パシフィック・ミュージック・フェスティバル(PMF)に於ける通訳業務の雇用者である組織委員会事務局関係者へのインタビュー分析を通じて、「通訳者という存在」をクライアントの視点から探ろうという試みである。

発表者は、1990年の創設期から22年間にわたり会期中の会議、シンポジウム、式典、レセプション、トーク付きコンサートやマスタークラス、NYの財団理事長アテンド、記者会見、取材等の各種通訳を担当し、現在もフェローとしてかかわっている。

「通訳者という存在」は、時に「空気」、「導管」、「透明な存在」「黒衣」などの「non-person」に例えられる一方で、「異文化ファシリテーター」「異文化コーディネイター」などの「仲介者」とみなされることもあり、更に、「チームの一員」「ファミリー」と称されることもある。

PMF創設10周年にあたる年に「通訳者という存在 - 望まれる通訳者像から望ましい通訳者像へ」と題したリサーチで、現役通訳者を対象にアンケートを実施し、「通訳者という存在は何に例えられるか」「通訳者はストレスの多い仕事だと思うか。ストレスの原因は何か」「クライアントから見た望ましい通訳者像は何だと思うか」などの設問に対して、現場での体験に基づいた回答を得て集計・分析した。

しかし、30周年の節目が近づいた今回は、クライアント側に語ってもらう長時間インタビューを分析する形式を選び、まず、「通訳を介したコミュニケーション」について、自由に語ってもらった。更に、2000年に通訳者に尋ねた質問にクライアントの視点から答えてもらうのみならず、「通訳者への信頼感・不信感」、「中立性」、「通訳者の介入や、異文化の仲介者としての役割を果たす事について」等の意見も求めた。

事務局幹部職員の多くは札幌市役所からの出向者や退職者が中心であり、通訳者を介した業務や外国人との業務経験がないケースも多い上に、会議やオペレーションの際に、日米の考え方の違いもあり、通訳者の役割が、必ずしも通訳業務には留まらない事例も多かった。

そのため、新崎(2010)にある、「通訳者が意図的に行う『不変・不介入原則』からの『逸脱行為』が、『コミュニケーション仲介者』役を果たすための『コミュニケーション調整と言えるのではないか』という問題提起を更に広義で捉えたクライアント側の考えも分析し、発表したい。

#### 【参考文献】

水野真木子 中村幸子 吉田理加 河原清志(2011)「通訳者役割論の先行研究案内」『通訳翻訳研究』

No.11

新崎隆子(2011)「通訳のコミュニケーション調整仮説—英日逐次通訳の事例から」『通訳翻訳研究』

No.11

溝口良子(2009)「通訳者の役割モデルの研究 -6つのスタイルと2つの機能」『通訳翻訳研究』No.9

辻和成(2006)「日本のビジネス通訳についての一考察～大手企業のグローバル人事を背景として」『通

訳研究』第6号

Wadensjö, C. (1998) *Interpreting as Interaction*. London/New York: Longman.

2 日目 A 会場 (303) 16:20 – 16:50

司会 河原清志

A-11

日越間ビジネス通訳者の逸脱行為—半構造化インタビューと M-GTA を用いて—

TRAN THI MY (東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士後期課程)

訳出の「正確性」「中立性」は各種通訳・翻訳倫理規定において重要な項目だとされてきた。しかし、通訳者が不変・不介入の原則からの逸脱行為をしばしばとっていることはピンカートン (1996)、椎名・平高 (2006)、瀧本 (2006) などにより明らかにされ、逸脱行為の研究結果が徐々に蓄積されている。ところが、これまでの研究では、英語を対象とした研究が中心であり、英語以外の言語間の訳出に着目した研究はまだ極めて少ない。

一方、ベトナムがチャイナ・プラス・ワンの最有力候補として脚光を集めるにつれて日越通訳の需要が一層高まってきたが、両国において日越通訳養成システムは整備されておらず、専門的な通訳訓練を受けていない通訳者が多い。専門性のある日越通訳養成システムを構築することは両国の日本語・ベトナム語教育機関のみならず、ビジネス界にとっても重要な課題である。その土台作りには、現在活躍中の通訳者が業務を遂行する際、どんな意識を持ち、いかなる作業を行っているかを調査する必要がある。本研究では、ビジネス通訳歴が 5 年以上ある 12 名の通訳者をインフォーマントとし、半構造化インタビューでデータを収集し、そのデータを木下 (2003) により提唱された Modified Grounded Theory Approach (M-GTA) の手法に従って分析を行った。その結果、【全作業に共通する通訳者の姿勢】、【通訳者による作業】および【通訳者が目指す三大目標】という 3 つの категория が構築された。【全作業に共通する通訳者の姿勢】を構成する項目は、「通訳する場によって異なる心がけ」および「権利行使の自制」がある。【通訳者による作業】を構成する項目は、「不変・不介入の言語変換作業」とそれ以外の作業である「削除」、「罵詈雑言の緩和」、「要約」、「決まり文句・クッション表現の追加」、「情報の追加」、「助言」、「ファシリテイト」および「三人称の使用」がある。【通訳者が目指す三大目標】を構成する項目は、「意思疎通の促進」、「和やかな雰囲気醸成・維持」および「クライアントの目標達成への貢献」がある。

#### 【参考文献】

- 椎名佳代・平高史也 (2006) 「異文化間ビジネスコミュニケーションにおける通訳者の役割: 日本語・英語の場合」『総合政策学ワーキングペーパーシリーズ』No.86、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科。
- 瀧本真人 (2006) 「AUSIT 倫理規定と通訳者の行動-ビジネス分野におけるダイアログ通訳の場合-」『通訳研究』第 6 号、日本通訳学会、pp.143-154.
- ピンカートン、ヨウコ (1996) 「通訳者には編集が許されるか-日本とオーストラリアの通訳原理の比較-」『通訳理論研究』第 11 号、日本通訳学会、pp.4-15.

1 日目 B 会場 (304) 14:00 – 14:30

司会 立見みどり

B-1

### 翻訳からポストエディットへ—産業翻訳における機械翻訳の利用

河野弘毅(ポストエディット東京)

英日・日英間のグーグル翻訳にニューラル機械翻訳が導入されてから二年近い時間が経過するなかで、市販の機械翻訳エンジンでも、ニューラル機械翻訳エンジンに分野別のアダプテーションを追加することで、一部の分野においては産業翻訳の下訳として実用価値のある品質が実現されるようになってきた。

ただし、実際に現在行われている産業翻訳の現場に「なんとなく使えそうな」機械翻訳エンジンの出力を導入するだけでは、期待されるような作業時間の短縮や作業効率の改善を実現できないことも多いというのが筆者の個人的実感である。

そうはいっても機械翻訳の開発サイドは日進月歩で進歩しており、分野によっては使わないで済ませるには惜しいと思われる品質の訳文が生成されることもまた実感としてあるため、この技術的成果を実務翻訳における時間短縮とコスト削減という結果に結びつけるには従来の産業翻訳とは異なる翻訳工程の開発が必須であるという認識を持っている。

この発表では、筆者が翻訳実務の現場で試行錯誤して開発中の「現状の機械翻訳を産業翻訳の下訳として利用するための最善の翻訳プロセスとそのプロセスを実現するための組織構成」について説明する。内容としては、機械翻訳が適用できる案件をどう選択するか、成果を得るにはどのような条件(エンジンの選択や顧客の期待管理等)を満たす必要があるか、機械翻訳の前処理として何を行い、機械翻訳後のポストエディットで何に着目して修正を行うか、また、ポストエディットにおける品質保証をどのように目標設定して実現するか、といった課題について筆者が現時点で考えるベストプラクティスを含む。

この課題には現在、多くの翻訳会社が強い関心をもって取り組んでおり、そこで開発された翻訳工程が今後の翻訳業界の仕事の進め方や組織構成、技術投資を本質的に左右する可能性があると考えため、当日は参加者の方からぜひ多くのご意見ご質問をうけて議論を深めたい。

時間的余裕があれば、近い将来において機械翻訳の利活用方式に一定のコンセンサスが生まれ、工程も組織も刷新された新しい翻訳業界がどのようなプレイヤーから構成され、そのとき社会の側は職業翻訳者と翻訳会社にどのような期待をするようになっているのか、といった中長期的な社会的影響についても意見交換する契機を提供したい。

1 日目 B 会場 (304) 14:40 – 15:10

司会 立見みどり

B-2

字幕翻訳におけるニューラル機械翻訳の可能性とその応用

平岡裕資(関西大学 M)

ウェブ上の情報がマルチモーダルな性質を帯びる昨今、自作のコンテンツを配信するクリエイターという職業、ユーチューバーが誕生した。彼らが作成する動画は一部が字幕形式で多言語化されているものの、そのほとんどが未翻訳である。人間翻訳よりもコストとデリバリーの面においてははるかに優れる機械翻訳はこの需要を満たす可能性を持っている。本研究の目的は近年に応用されつつある人工知能を用いたニューラル機械翻訳が持つ可能性を字幕翻訳という観点から追究すること、すなわち機械翻訳の利点と欠点を調査し、さらなる応用を模索することにある。

応用の具体例として、日英における字幕用プリエディットがある。字幕作成段階における有効な書き換えの規定を作成することで、コンテンツ配信者自身による翻訳が可能になることを期待する。またこの知見はファンサブのみならず、テレビや映画などの他分野、特に翻訳の需要が満たされていない分野にも応用できるかもしれない。これらの点において、本研究は非常に意義があると考えられる。

上記の目的を達成するため、前段階としてニューラル機械翻訳が現場に抱える問題を同定する必要がある。そのため、二つの評価基準を設けた。まず挙げられるのが字幕翻訳の重要な規範でもある文字数制限(Characters per Seconds)である。英語字幕において標準的な 12cps に加えて 16cps、18cps の基準も同時に設け(情報の性質上、繰り返し再生可能であることを考慮すると、制限を緩和できる余地があると考えられる)、それぞれの基準をどの割合で満たしているのかを定量的に見る。反対に質的な評価基準として意味の正確性をあげる。一つの手法としては、Goto et al (2013)が特許翻訳における自動翻訳文の評価で用いた Acceptability がある。これは、対象の訳文が実用的な面で意味を正しく伝達しているのかを文単位で見る人手評価の手法であり、字幕の評価に適していると考えられる。これと同時に BLEU や IMPACT などの自動評価も行い、参照訳(ファンサブ)との字面上類似度を測定する。また、一種のプリエディット(例えば、原文の字幕を文単位でハコ書きするなど)が評価の結果に寄与するのかも合わせて調査する。

#### 【参考文献】

Goto, I., Chow, K. P., Lu, B., Sumita, E. and Tsou, B. K. (2013). Overview of the Patent Machine Translation Task at the NTCIR-10 Workshop. In *Proceedings of the 10th NTCIR Conference*, 260-286.

1 日目 B 会場 (304) 15:20 – 15:50

司会 立見みどり

B-3

連体修飾節と被修飾語の意味関係から見る日本語内容節の翻訳アプローチ—機械翻訳を中心に—

谷 文詩(筑波大学大学院)

機械翻訳サイトを利用する場合、(1)a、(1)b、(1)c の日本語「連体修飾節+被修飾語」構文を入力すると、(2) a'、(2)b'、(2) c' の中国語訳文が出てくる。

- (1)a 五日に自宅で自殺未遂を図ったという供述は真実に違いない。  
 (1)b 朝食を与えずに梶の取り調べを行なった疑いがあるからです。  
 (1)c 梶本人しか知らない「誰か」が存在する可能性は否定できない。

(横山秀夫『半落ち』)

- (2)a' 5 日在自己家自杀未遂的陈述一定是真实的。  
 (2)b' ? 因为他们 涉嫌不吃早餐, 进行了梶川的调查。  
 (2)c' ? 不能否定 只有梶本人才知道的“谁”的存在。

(網易有道機械翻訳サイト<sup>i</sup>)

(1)a、(1)b、(1)c のような「連体修飾節+被修飾語」構文は従来「同格連体名詞」(奥津(1974))、「内容補充」の関係(寺村(1977))などと呼ばれてきた。連体修飾節と被修飾語が同格の関係を持っている。あるいは、連体修飾節は被修飾語の内容を補充している。しかし、この三つの原文の構文は同じだが、訳文の構文は異なっている。

- (3)a' 5 日在自己家自杀未遂的 陈述 一定是真实的。(=2a') 【連体修飾節+被修飾語】  
 【五日に自宅で自殺未遂を図った】 【供述】  
 (3)b' ? 因为他们 涉嫌 不吃早餐, 进行了梶川的调查。(=2b') 【被修飾語、連体修飾節の内容】  
 【疑い】 【朝食を与えずに梶の取り調べを行なった】  
 (3)c' ? 不能否定 只有梶本人才知道的“谁”的存在。(=2c') 【連体修飾節の内容のみ】  
 【梶本人しか知らない「誰か」が存在する】

同じ「内容補充」関係の「連体修飾節+被修飾語」構文に対し、機械翻訳サイトは異なる翻訳アプローチで訳すということは分かるようになる。その原因について、連体修飾節と被修飾語の意味関係が違うからと推論する。本発表は以上の推論を検証し、連体修飾節と被修飾語の意味関係の面から、日本語「連体修飾節+被修飾語」(内容補充)を中国語に訳する場合の翻訳アプローチを提案してみたい。

<sup>i</sup>本文で分析された機械翻訳サイトによる訳文はすべて 20180625 に得たものである。

<http://fanyi.youdao.com/>





1 日目 B 会場 (304) 16:40 – 17:10

司会 内藤 稔

B-4

対話通訳における通訳者のトラブル修復についての考察—新生児訪問模擬通訳の会話分析から

—

飯田奈美子(立命館大学衣笠総合研究機構生存学研究センター)

対人援助の専門家—クライアント間には権力の非対称性があり、通訳者が介入行為(コミュニケーションの調整やケア)を行うことがある。しかし、このような通訳者の行為は通訳倫理の「正確性・中立性」から逸脱するものであり、通訳者自身の意見を押し付けたりする不適切発言と表裏一体のものである。適切な介入がどのようなものか、またどのようになされるべきものなのかについて、通訳場面の検証による研究は十分になされていない。そこで、本研究では、通訳者の介入行為を特定していくために、通訳者の自発的発言の「トラブル処理発言」に注目し、会話分析法により分析を行う。

研究方法は、新生児訪問場面を再現して通訳ロールプレイを行い、その様子を録音・録画し、会話分析法にて分析をした。特に通訳者がトラブルの修復作業をしている場面を収集して分析を行った。対話通訳における通訳者の自発的発言には、①介入行為、②不適切発言(通訳者の意見を述べたり指示を行うなど)、③トラブル処理発言がある。トラブル処理発言とは、訳出の完了の位置を説明したり、訳出に対する理解において生じたトラブルを修復したり、トラブルを修復したことを説明したりするものと定義する。修復(repair)とは、会話分析で用いられる分析概念で、発話の産出/聞き取り/理解において生じたトラブルを、それまでの発話や連鎖の進行を中断して、トラブル解決に向けて対処する手続きのことをいう(串田他 2017:193)。

分析の結果、通訳者は質問に対して求められる回答が返ってこないときに質問者に代わり、質問内容の説明を行うなどの修復作業を行っていることがわかった。トラブルの要因には、①通訳者の訳出の問題 ②要通訳者(回答者)の認知の問題があり、通訳者は二つの要因どちらもが通訳者の責任の範囲にあると考えており、このことにより通訳者は、修復作業をする権限が通訳者にあると認識していることがわかった。通訳者のトラブル処理に対する認識、特に要通訳者の認知に問題がある場合のトラブルについて明確化することによって、通訳者の介入行為がなぜ、どのように行われるかを特定することに繋がると考える。発表では、二つのトラブル要因の事例の考察を詳細に述べ、フロアとの議論、意見交換を行っていききたい。

#### 【参考文献】

串田秀也・平本毅・林誠(2017)『会話分析入門』勁草書房

1 日目 B 会場 (304) 17:20 – 17:50

司会 内藤 稔

B-5

**手話通訳者は日本手話音節の不適格性をどの程度認識できるか**

**原大介**(豊田工業大学)、**米田拓真**(豊田工業大学)、**中野聡子**(大阪大学)

手話音節は、「手型」、「手の位置」、「手の動き」の3つのカテゴリに加え、「掌・指先の向き」、「利き手の接触の状態」等のいくつかの要素により構成されている。日本手話の音節形成では、日本手話で認められている音節構成要素の組み合わせのうち、すべての音節が適格な音節とはならない。このことは、音節構成要素同士の組み合わせに、何らかの制約が課せられていることを意味している。音節構成要素の適格な組み合わせを論じる分野を言語学で音素配列論と呼ぶが、日本手話の音素配列論は未だ明らかになっていない。したがって、多くの手話通訳者および手話通訳者を目指す人たち(以下、手話通訳者)は、経験的に日本手話の音素配列を学習しなければならない状況である。本研究では、日本手話を母語としない日本手話通訳者たちが、日本手話音節の適格性をどの程度正しく判定できるかを検定しその結果を発表する。検定のための資料として、日本手話研究所の「新しい手話」(全 10 冊)シリーズに掲載されている語を利用した。単音節から形成されている語はそのまま使用、複数音節から形成されている語は音節に分解して使用した。予備調査として、のべ 40 名の日本手話母語話者(以下、ろう者)に協力を依頼し「新しい手話」に描かれたイラストを見て不適格音節を指摘してもらった。次いで、これらのうち不適格性が高いと考えられる 607 音節を抽出し、ろう者 1 名に依頼して動画撮影を行った。動画は本研究専用で作成されたウェブサイトアップロードし、ろう者 8 名アクセスしてもらい、個々の音節に関して適格性の判定してもらった。その結果、過半数のろう者が不適格と判定した音節を「真に不適格音節」と認定した。通訳者 13 名にも上記の動画を見てもらい適格・不適格の判定を行ってもらい、過半数の通訳者が不適格と判定した音節を、「通訳者が不適格と認定した音節」とした。ろう者は、607 音節中、409 音節を不適格(=「真に不適格な音節」)、198 語を適格と判定した一方、通訳者は、89 音節を不適格、518 音節を適格と判定した。この結果を Cohen's Kappa(カッパ係数)や不適格性に関する適合率と再現率、その他いくつかの観点から分析した結果、通訳者は日本手話の不適格音節を適格音節から区別することが難しい状況であることが判明した。

2 日目 B 会場 (304) 9:30 – 10:00

司会 田辺希久子

B-6

### 通訳と翻訳の一体化する教育モデルの探索について

龐 焱(ホウ エン)(中国広東外語外貿大学日本語学院)

一般的に、翻訳実践は通訳と筆頭翻訳に分けている。通訳は、通訳者の口頭の表現を通じて、言語間の切り替えの即時性と情報伝達の有効性を強調している。筆頭翻訳は、翻訳者の書面的な言葉の転換を通じて、原文の言葉の特徴と精神的な意義の客観的な再現を重視している。通訳と筆頭翻訳の作業は翻訳の規範、方略などの面において、本質的な類似性があるため、翻訳の教育実践においても、口頭通訳と筆頭翻訳の作業基準、認知体系、品質評価などの面における差異性を明確すべき、口頭通訳と筆頭翻訳の独立的な訓練体系の合理性を肯定しながら、口頭通訳と筆頭翻訳の訓練の補完的な影響力を客観的に評価すべきだとも思う。この考え方にに基づき、口頭通訳と筆頭翻訳を一体化させる教育モデルの構築を探索することは、翻訳教育の改革と翻訳教育のレベルアップを促進することができるだろうと思われる。

本研究は主に翻訳のトレーニングが通訳のレベルアップに影響しているかどうか、もし、影響があるとするなら、どのような影響を果たすのかを検討しようとするものである。多くの通訳者を対象として、多様な翻訳トレーニングの実験を実施した。実験対象は本大学で日本語を専攻している三年生の六つのクラスの中から、ランダムに 40 名を抽出し、初級レベルの通訳試験を受けさせ、合格した 28 名の学生をそれぞれ 14 名ずつ、二つのクラスに入れて、逐次通訳の授業を受けさせる。

実験方法は、二つのクラスの逐次通訳の授業を同じ教師に担当してもらい、毎週 2 コマ (1 コマは 90 分ほど) の逐次通訳の講義を実施してもらう。二つのクラスの内の一は翻訳訓練をしないクラスとして、もう一クラスは授業開始してから 15 間ぐらい翻訳の訓練をする。翻訳訓練の内容は、普通会議通訳時の原稿であり、評価する基準は、単純な筆頭翻訳 (以下は単純の翻訳と通称する) の基準ではなくて、原稿付きの通訳 (以下は通訳的な翻訳と通称する) の基準に基づくことにする。実験時間は、一学年 (合計 36 週間) とし、途中は、教師が一か月ごとに、二つのクラスを対象として、同じ時期、同じ内容で、試験を行い、それぞれの試験結果をデータとして、統計し分析をする。分析結果の比較は二つの軸に沿って行い、つまり、翻訳のトレーニング無しのクラスと翻訳のトレーニングありのクラスの試験結果の比較と、翻訳のトレーニングありのクラスのメンバーたちの毎月の試験結果の比較である。

以上の実験方法で比較し、分析した結果によると、以下のようなことが明らかになった。1) 翻訳のトレーニングは通訳の習得に明らかな効果がある; 2) 全体から言うと、筆頭翻訳のトレーニング方法は通訳作業の特徴に満足すればするほど、通訳の習得に対する促進効果が顕著になる; 3) 筆頭翻訳トレーニングは通訳の効果に対する影響は段階的な特徴を示している、つまり、通訳経験が豊富であればあるほど、通訳習得の効果に対する促進的な役割もますます大きくなる。

以上のような結論は、通訳と翻訳の一体化する教育モデルの構築に関する探索と改革の必要な理論基礎となり、翻訳のシステムの一般性の認識、通訳教育法の改善及び通訳教材の編集に一助になれると思われる。

2 日目 B 会場 (304) 10:10 – 10:40

司会 田辺希久子

B-7

文化財説明文における語句の平易化方法: 翻訳ストラテジー類型との比較分析

宮田 玲(名古屋大学)、立見みどり(立教大学)

日本語を第一言語としない読み手を対象とした情報発信において、限られた基本的な語彙と単純な構文で構成される「やさしい日本語」の利用が進んでいる。近年は、自治体による災害情報や生活情報の提供だけでなく、観光コミュニケーションにおける利用も期待されている。我々の研究グループは、観光情報の中でもとりわけ日本の文化財を説明する文章を対象とした、やさしい日本語化プロジェクトを 2017 年度から継続している(科研費基盤研究 (C) 17K00466)。このプロジェクトでは、主に外国人観光客に対して日本の文化財(中でも民家などの建造物)を効果的に説明するための作文法と執筆支援ツールの開発を目指している。

「やさしい日本語」による執筆は、最初から平易なテキストを書く場合と、既存のテキストを平易に書き換える場合があり、後者はいわば言語内翻訳である。これまで言語学や自然言語処理の分野では、テキストの平易化を主に「構文や語彙の言語的な変換」とみなしてきたが、より広く、「起点テキストに書かれている文化・社会・歴史的背景知識を共有しない読み手に対して、内容を効果的に伝えるためのテキストの編集操作」と捉えると、翻訳研究との接点が見えてくる。具体的には、「翻訳ストラテジー」(翻訳シフト、翻訳メソッド、翻訳テクニック等を含む)として提案されてきた種々の類型が、平易化方法を説明・考案する上でも有用である。例えば、Molina & Albir (2002) による類型は言語間翻訳を想定したものであるが、同一言語内で「書斎」を「部屋」に言い換える場合と「読書などをする部屋」に言い換える場合を、それぞれ「一般化」(Generalization) と「描写」(Description) のストラテジーとして説明できる。

以上を踏まえ我々は、効果的な平易化方法を明らかにするために、翻訳ストラテジーとの共通点・相違点を、対象とするコミュニケーション形態の属性と具体的なテキスト編集操作の観点から検討した。単語・フレーズの単位を分析対象とし、目的や対象の異なる複数の翻訳ストラテジータイプを選び、平易化事例への適用可能性を検証した。平易化事例には、文化財説明文だけでなく、日本語教師による高品質の平易化がなされている NHK のやさしい日本語版のニュース記事(NEWS WEB EASY) を用いた。

本発表では、我々の研究プロジェクトの概要を紹介し、観光情報発信における平易化や翻訳のあり方について問題提起をした上で、平易化方法と翻訳ストラテジーの比較分析結果を報告する。

#### 【参考文献】

Molina, L. & Albir, A. H. (2002). Translation techniques revisited: A dynamic and functionalist approach. *Meta*, 47 (4), 498–512.

2 日目 B 会場 (304) 10:50 – 12:00

B-8 B-9

### プロの通訳者による実現場でのパフォーマンス・データを活用した通訳コーパスの構築とその応用可能性

松下佳世(立教大学)、山田 優(関西大学)

本発表は、通訳翻訳の研究者・教育者が広く利用可能な日本最大規模の日英通訳の対訳コーパスを構築することを目的とした研究プロジェクトの進捗状況を報告するとともに、メンバーが取り組んでいる応用研究について発表するものである。

本コーパスの元となるデータは、公益財団法人・日本記者クラブが2009年からYouTubeの専用チャンネルを通じて公開している会見映像のうち、日英間の通訳音声が含まれた映像・音声データである(平成29年度末時点で385件、平均約1時間)。平成27年に日本記者クラブとの間で研究用のコーパス構築に向けた覚書を締結し、平成28年度からは日本学術振興会より科学研究費を得て構築作業を進めている。研究期間が終了する平成32年3月までに100件分をデータ化し、その後の継続的な構築体制も整える予定である。

本コーパスの特徴としては、プロの通訳者が実際に行ったパフォーマンスをデータ化していること、同時通訳と逐次通訳が両方含まれていること、スクリプトを元にしたスピーチから質疑応答まで、さまざまなパターンが含まれていることなどが挙げられる。

過去2年半の研究でコーパスの詳細仕様およびデータの作成方法が確定した。現在は立教大学、関西大学に広島修道大学を加えた三大学の学部生・院生の協力のもと、コーパス構築に向けた作業体制も確立されている。今年度は、入力作業と並行する形で、データの品質向上のための点検体制づくりと、収録済データの応用可能性の検証を行っている。

公開形態として想定しているのは、動画と二種類の音声(原発話と通訳者の訳出)、ならびに各音声の波形と書き起こしたトランスクリプトを一画面に収めることができるELANというフリーソフトウェアを用いた形式である。過去2年半の試行錯誤の末、人的工数を最も要するとされていた音声からテキストへの書き起こしと、音声とタイミングを合わせたアノテーション付与に、IBM Watson (Bluemix)の自動音声認識を活用できることを確認、大幅な作業効率向上と費用削減を実現できた。これらの経験を踏まえ、本発表では、コーパスの設計と実際の構築プロセスを説明するとともに、コーパスを使って実施している応用研究の例を紹介する。また、参加者から直接質問や要望を聞くことで、本学会の会員が有効活用できるコーパスの完成を目指す。

2 日目 B 会場 (304) 15:40 – 16:10

司会 藤濤文子

B-10

ブルデュー「文化資本」の観点から翻訳者の社会的地位を考える: ISO 17100:2015 の導入をめぐる  
齋藤百合子(立教大学)

2015 年、翻訳の国際規格である ISO 17100:2015 が発行された。本 ISO は、翻訳の品質向上を目的として翻訳プロセスを標準化したものだが、プロセスの一翼を担う翻訳者に一定の資格要件を課すことを通じて、翻訳者の社会的・経済的地位向上を図る狙いもある。しかし、翻訳者の地位は向上するのだろうか。

筆者は修士論文で翻訳者の経験について半構造化インタビューを実施した。結果を分析したところ、女性翻訳者たちは、「帰国子女」、「インターナショナルスクール」、「文学研究科修了」など、いわゆる文化資本の豊かなバックグラウンドを有しており、翻訳者を「一家の大黒柱にはなれないが、自分に向いている」、「人助け」、「縁の下の力持ち」と表現するなど、そのスキルを経済資本的資源ではなく文化資本の延長として捉えていた。一方男性は、翻訳を「二流の仕事」、「男のする仕事ではない」と考え、翻訳経験を足掛かりに講師業や仲介業へと転身していた。

女性インタビューたちが、やりがいはあるものの決して高くはない報酬で翻訳を続けられるのは、配偶者が十分な所得を得ているためであった。ブルデューのいう「文化資本」を備えた女性が、「経済資本」に転換しやすい「学歴資本」や「社会資本」を持つ男性を配偶者とすることで、このような働き方が可能になっている。インタビューの女性たちは、所有する文化資本を積極的に経済資本に結びつけるより、自らのアイデンティティ形成のために用いていると考えられた。

本 ISO が翻訳者の資格の筆頭に学位を挙げるのは、経済資本と強く関連する学歴資本を翻訳者に所持させる意図の現れとも読める。同時に、ここで翻訳者が要求される資格は最低限の能力しか保証しないため、試験によるさらなる認定制度を導入すべきであるという意見もある。

しかし、本 ISO に対する市場の認知や評価が醸成されない中で認定制度を採用すれば、資格の持つ意味がクライアントに理解されず、有資格者に対する正当な評価がなされないことにより、翻訳者という職業の文化資本性をさらに強化する可能性がある。それを回避するには、クライアントの翻訳リテラシーを高めることで「翻訳は高度な教育と専門性を要する作業である」と認識させ、翻訳者のプロフェッショナルとしての自覚を促すことで、低報酬や二次的な仕事という通念から脱却させる必要があると考える。

2 日目 B 会場 (304) 16:20 – 16:50

司会 藤濤文字

B-11

通訳案内士制度の変遷について—「通訳」を含む通訳案内士の業務に注目して—

佐藤 道(金城学院大学大学院博士前期課程)

「通訳」と名が付く唯一の国家資格「通訳案内士」(2018 年から「全国通訳案内士」と名称変更)は、有償で外国人に観光ガイドをする業、通称「通訳ガイド」とも呼ばれる。急増する訪日外国人への対応や 2020 年開催の東京オリンピックにかかわるガイド需要も視野に入れ、2018 年 1 月 4 日からその業務が有資格者だけでなく無資格者にも解禁となった。68 年間有資格者のみに認められていた業務の市場が一気に拡大することとなった今、本研究では、ここまでの成り行きを一度振り返り今後の「通訳ガイド」業務の展望についての考察を試みる。

まず、近代日本における通訳ガイド業務誕生の背景を探るため、通訳ガイドの先達とされる伊藤鶴吉の活動(金坂 2000)、貴賓会(中村 2006)や東洋通弁協会(上田 2010)等を経て、現在の通訳案内士の原型が形成されるまで(真子 2016)を先行研究を参考に考察する。

また、2008 年から観光庁・通訳案内士所属団体・ランドオペレーターなどのメンバーから成る「通訳案内士制度のあり方に関する検討会」が 17 回にわたって開催され、①試験内容を含む選考方法の見直し、②通訳ガイドの需要と供給のミスマッチ解消、③無資格ガイド対策、④有資格ガイドの質の向上など様々な事柄が議論された。その間、通訳案内士所属団体は難色を示すもその資格が業務独占から名称独占へ法改正となった。これらのことを受けて、2018 年度実施の試験から「実務」科目が追加となった。さらに、有資格者への研修を義務付けることによって有資格者ガイドの質を向上させることで他との差別化を図り、望まれるガイド像を築くという結論を導いた過程について、当検討会議事録やその概要から考察する。

その他、筆者は 2013 年度実施の二次口述試験より「通訳」試験も導入されたことにも注目した。筆者は現役通訳ガイドを対象に「通訳」業務の有無やその内容についてインタビューやアンケートによる調査を行ったところ、半数以上が「ガイド」だけでなく「通訳」業務の依頼も受けていることがわかった。2018 年からのガイド市場への無資格者参入を機に、通訳・ガイド両市場が一段と拡大することが予測されることも踏まえ、通訳ガイドの業務における今後の動向についても考察を試みる。

#### 【参考文献】

国土交通省観光庁「通訳案内士制度のありかたに関する検討会」会議資料最終取りまとめ  
(2017.3.10)

金坂清則(2000)「イトー、すなわち伊藤鶴吉に関する資料と知見—イザベラ・バード論の一部として」  
『地域と環境』2000 年 No.3

上田卓爾(2010)「案内業者取締規制とガイド活動について」『日本観光研究学会』全国大学学術論文集  
25

中村宏(2006)「戦前における国際観光(外客誘致)政策」『神戸学院法学』第 36 巻第 2 号

真子和也(2016)「通訳案内士制度をめぐる動向」『国立国会図書館』調査と情報 No.890



1 日目 C 会場 (305) 14:00 – 14:30

司会 坪井睦子

C-1

### 英日翻訳における日本語らしさと必須情報

北村富弘 (法務省大阪刑務所国際対策室)

英日通訳翻訳(以下「英日翻訳」という。)において日本語らしい表現法をとるという選択をする場合、単に英文を理解するときとは異なる情報を把握することが必要になる。本発表ではそれについて文法項目を中心に考察する。

英日翻訳あるいは通訳(以下、翻訳という)を行う過程では、単に英文を読解・聴解するとき以上に ST から取得すべき情報がある。たとえば、例えば Tom is there. と The dish is there という英文を翻訳する場合、日本語では動詞に「いる」と「ある」区別があるので ST の主語が生物なのか無生物なのかいう意味素性を判別する必要がある。こういった判別は英語文脈の中のみで英文を理解するときには必ずしも必要ではない。

日本語らしさを求める英日翻訳を行う場合、上記の例と同様に ST を単に英語文脈で理解するとき以上に ST から取得すべき情報がある。このような情報をここでは必須情報という。なお、ここでいう「日本語らしさ」とは、文法上義務的ではないが日本語文脈で好まれる表現を言う。

今回の分析では、対照認知言語学で日本語の特徴として論じられている文法項目を中心に日本語学を応用することで必須情報を抽出した。分析結果として、生物/無生物、人物の社会的役割、文表現が感受者の解釈であるか否か等の要素が必須情報として見出された。いずれも類型言語学で指摘されている日英語の差異に関わりがあり、その差異に橋を架けるために必要な情報であるといえよう。これら必須情報には生物/無生物の区別のように単語レベルの意味素性で解決が付き、作動記憶の負荷が比較的軽いと思われる要素もあれば、人物の社会的役割のように非テキスト文脈や百科事典的知識といったリソースを使用するために作動記憶への負荷が比較的高いと思われる要素もある。

今後の研究につながる考察として、こういった必須情報の中には英語からヨーロッパ言語への翻訳では必須ではないものがあると思われ、それとの比較で英日翻訳では必須情報の項目数が多く、さらに質的にも作動記憶への負荷が高い項目があることから、翻訳行為全体を通して作動記憶への負荷が高くなっていることが予想される。したがって、たとえば英日通訳場面で保持できる ST の長さについて、この負荷を一因として分析することもできよう。

発表では、日本語の特徴ごとに具体的な対訳例を示しながら主な分析結果と考察を述べる。

1 日目 C 会場 (305) 14:40 – 15:10

司会 坪井睦子

C-2

日本における韓国絵本翻訳—『天女かあさん』を題材に

尹 惠貞(ユン ヘジョン)(一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程)

2016年韓国で『イサンハン オンマ』(おかしな母さん:筆者直訳)(以下、韓国語版をSTとする)が出版され、その翌年の2017年に日本で『天女かあさん』(以下、日本語版をTTとする)として翻訳出版された。STではソウルという指標の出現から、その文体と三人の登場人物の話体は全て標準韓国語で書かれている絵本となっている。しかし、TTではソウルという指標がカタカタで「ソウル」と翻訳され、絵本の文体と登場人物の二人は標準日本語で、一人は日本語方言で翻訳されている。何故このような現象が生じるのか。その理由を分析考察することを本報告の目的とする。

なお、このような現象が生じる可能性として考えられる理由は、①翻訳者が関西出身であること。②絵本の絵を読みこんでの翻訳をしたこと、など考えられる。しかし、この二つの理由のみでは、納得できない諸現象がSTとTT間では生じているので、STとそれに対する直訳、TTを並べて、絵とともにできる限り多くの例を出しながら分析考察したい。

このような方法論を用いるのは、絵本の定義と関わる。すなわち、絵本とは、言葉と絵に相互作用がある本のことをさす。より具体的に言うと、藤本(2007:20)は、「絵本では、「文章」は読むだけでなく見るものであり、「絵」は見るだけでなく読むものなのです」と述べている。また、絵本を翻訳する際は、ヤーコブソンの翻訳理論(1973:57-58)を用いる。つまり、翻訳には①言語内翻訳、②言語間翻訳、そして③記号法間翻訳が含まれる。③の記号法間翻訳は、ことばの記号をことばでない記号体系の記号によって解釈することをいう。絵本翻訳では、このうち②と③が必要となるが、③ではことばからの解釈のみに言及しているので、単純に③とすることはできず、前述した藤本の「「絵」は見るだけではなく読むものなのです」というくだりを③の記号法間翻訳に反映しなければならない。なぜならば、絵本翻訳は、言語間でただ言葉を置き換えるだけでは足りず、STの言葉を削除し、絵を読みこんでそれをTTの言葉に移し換える必要も生じる場合があるからである。

#### 【参考文献】

藤本朝巳(2007)『絵本のしくみを考える』日本エディタースクール出版部

ドゥーナン・ジェーン(2013)『絵本の絵を読む』(正置友子・灰島かり・川端有子・訳)

玉川大学出版部

ローマン・ヤーコブソン(1973)『一般言語学』(川本茂雄他・訳)みすず書房

1 日目 C 会場 (305) 15:20 – 15:50

司会 坪井睦子

C-3

**アラビア語放送通訳のストラテジーとその手法に関する考察—アルジャジーラニュースの放送通訳を事例に—**

上川アルモーメンアブドーラ(東海大学国際教育センター)

**0.日本のメディアとアラビア語放送通訳**

放送通訳とは、同時通訳であろうと時差通訳であろうと、極限的な状況で言語処理する訳出作業である(西村 1999)。また、日本で放送通訳という特殊な形態の通訳が最も長い歴史を持って盛に行われているのはNHK 衛星放送である。NHK で衛星放送が始まったのは1989年で、来年で30周年を迎えることになる衛星放送で放送通訳はもはや根強く定着しているものだと言える。こうした状況を背景に、本年は、NHK-BS1 放送が手がける「カタールの衛星テレビ局アルジャジーラニュース」の日本語による放送通訳がスタートしてから15年目になる。なお、本稿で扱う「アルジャジーラニュース(アラビア語放送)」とは、NHK が手がける、アラビア語から日本語に訳した放送を指す。

一方、翻訳と通訳の両方の性質を持っている放送通訳という用語は多義的な概念であるが、本研究では時差通訳に限定し「アルジャジーラニュース」の日本語による放送通訳原稿及びインフォーマントとなる発表者自身の具体的な通訳記録(計 1000 回)を題材に通訳手法の分析を行う。

**1.研究の目的とそのアプローチについて**

NHK 衛星放送の二カ国語放送に関しては、これまで様々な側面からの研究がなされているが、アルジャジーラを始めとするアラビア語による衛星チャンネルの二カ国語放送とその通訳プロセスについては一切考察が行われていないのが現状である。そこで本研究の第1の目的は、従来のアラビア語放送とその通訳の研究においてほとんど分析されていない「アラビア語放送の日本語通訳は、どんなストラテジーで訳されているかを明確にすることである。また、第2の目的はアラビア語放送通訳において通訳・翻訳法とその困難さにどんな原則またはどんな特徴が働いているかを確定することにある。このため、複数のアラビア語訳者(8名)にアンケートを取ることにしてこれらの目的を達成するために次の課題を取り上げる。ア) 日本語による時差通訳の意義及び、情報の補足や音声表現など時差通訳者に求められる技法とその翻訳過程である。また、その変換プロセスに伴う、両言語の表現における「明示化」または「凝縮化」の翻訳手法について、日阿語の言語体系の相違によって必然的に起きる場合と言語の組み合わせにかかわらず起きる場合の一部を検証していく。

**【参考文献】**

西村友美(1999)「時差通訳のストラテジーと言語認知」『京都橘女子大学研究紀要』第26号 pp.69-84.

1 日目 C 会場 (305) 16:40 – 17:50

C-4 C-5

「日本の通訳翻訳史」研究プロジェクト成果報告—近世の通訳翻訳者をめぐって

佐藤美希(札幌大学)、古川弘子(東北学院大学)、田中深雪(青山学院大学)、齊藤美野(順天堂大学)、坪井睦子(順天堂大学)、平塚ゆかり(順天堂大学)、長沼美香子(神戸市外国語大学)、北代美和子(翻訳家・東京外国語大学)、南條恵津子(神戸女学院大学)

「日本の通訳翻訳史研究プロジェクト」は、これまでの通訳翻訳研究では考察が深められていない事例や関連言説を通じて日本の通訳翻訳の歴史をたどることを目的として、2017年10月に研究をスタートさせた。同学会年度では、近世の阿蘭陀通詞・唐通事・朝鮮通詞・琉球通事・蝦夷通辞・漂流民通訳者について扱った。彼らに関しては、歴史学・言語学・文化史などをはじめとする他分野での先行研究は豊富にあるものの、通訳翻訳研究の視点からの考察が進んでいるとは言い難く、今後さらに研究を深化させる必要性があろう。

本プロジェクトはこうした通訳者たちを把握する研究の端緒に就いたばかりであるが、メンバーがこれまで知り得た近世の通訳翻訳の知識や情報を今後どのように繋げ、通訳翻訳研究の視座からどのような学術的貢献ができるのか、中間報告を行う。特に、近世の通訳者たちの状況を見ていくと、「周縁性」「規範」「倫理」「国策」などが暫定的な共通項と考えられる。こうした要素を踏まえながら、プロジェクトがこれまで得た知見と今後の展望を述べる。

阿蘭陀通詞と唐通事は、言語の教育や通詞／事の養成も含め、近世でも比較的早く職業としての体制が整っていたことが知られている。上記のキーワードを参照しながら、彼らの残した業績と問題点を通訳翻訳研究の視点から紐解くことは重要な作業となる。

朝鮮通詞・蝦夷通辞・漂流民通訳者は、これまで通訳翻訳研究ではほぼ扱われてこなかった。本発表では朝鮮通詞の雨森芳洲、蝦夷通辞の上原熊次郎、漂流民としての語学力を生かして外交の場で通訳を務めた音吉(乙吉)ら、具体的な個人に焦点を当て、先行研究や一次資料をもとに、彼らの通訳翻訳者、または後進の指導者としての思想や仕事をたどる。彼らが「周縁」の存在でありながらいかに「国策」の担い手となり、異言語異文化と日本が関わる際にどのような役割を果たしたかを考える。

琉球通事も同様に、通訳翻訳研究の視点からの考察が期待される。琉球には対中国の進貢貿易に関わった福建からの帰化人集団が存在し、ペリー提督ら欧米船との交渉が通訳者を介して大和(江戸幕府)とアジア各国との間に位置するその地でおこなわれていたのである。

こうした複数の通訳翻訳者たちの状況や事例についてプロジェクトで得てきた知見を学会員と共有し、研究の中間報告としたい。

2 日目 C 会場 (305) 10:10 – 10:40

司会 長沼美香子

C-7

英文和訳における「増訳」に関する研究—*The Great Gatsby* の英語原著と日本語訳の比較を通して  
趙 洋 (大阪大学言語文化研究科博士後期課程)

グローバリゼーションとともに、世界中の各国が地理的な距離を超え、経済、文化、情報共有などによってつながることが現実となっている。しかし、言葉の多様性と異文化の壁の問題は、無視されるわけではない。そのため、翻訳の重要性は、ふたたび取り上げられつつある。翻訳実践を支えているのは、翻訳理論と言えらる。具体的な翻訳方法への研究は翻訳理論の重要な部分であると考えられる。いろいろな翻訳方法のなかで、「amplification」(後述は中国語の呼び方を引用して「増訳」と呼ぶ)という方法は、日本語訳の作品の中で広く応用されているが、日本語には適切な呼び方が存在しない現状であり、その方法についての研究も不足な状態である。「明示化」(「explicitation」の和訳)という方法が翻訳分野に認識されているが、「amplification」とどのような関係があるかという疑問が出ている。そのため、本発表では、F・スコット・フィッツジェラルドが執筆した英語小説 *The Great Gatsby* と村上春樹訳の『グレート・ギャツビー』を研究対象として比べ、訳本で加えられた内容と効果を分析する上で、「amplification」という方法についてカテゴリー別に分類し、「明示化」と異なる翻訳方法ということを検証する。そのうえ、「明示化」とはっきりと区別するため、「amplification」を「増訳」という呼び方を主張したい。

事例の考察を通して、訳者はできるだけ目標言語の読者に起点言語の読者と同じように起点テキストの意味とニュアンスを伝えることが明らかになる。起点言語と目標言語の差異や起点言語の生まれる文化と目標言語の生まれる文化の差異など、いろいろな方面から見ると、関連する内容を加えることによってそちらの差異を縮めることがよく見られる。つまり、「増訳」の必要性和普遍性が表明されている。本発表の研究結果として、「増訳」を 15 種類にカテゴリー化する。しかし、すべての「増訳」は翻訳にとって不可欠であるかどうか、換言すれば、分類されている 15 種類の「増訳」が全部積極的な効果を発揮するかどうか、目標読者により流暢で自然な訳本をもたらすかどうか、これからの研究の中で留意されるべき点であると考えられる。

#### 【参考文献】

- Baker, M., & Saldanha, G. (2009). *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*. Routledge. (=藤濤文子監修・編訳(2013);伊原紀子, 田辺希久子訳『翻訳研究のキーワード』研究社)
- Munday, J. (2012). *Introducing Translation Studies: Theories and Applications*. 3rd ed. London and New York:Routledge. (=鳥飼玖美子監訳(2009)『翻訳学入門』みすず書房)
- Pym, A. (2010) *Exploring Translation Theories*. London and New York:Routledge. (=武田珂代子訳(2010)『翻訳理論の探求』みすず書房)

2 日目 C 会場 (305) 10:50 – 11:20

司会 長沼美香子

C-8

**ヒエロニムスとルフィヌスの翻訳論争:オリゲネス『諸原理について』をめぐる**

加藤哲平(日本学術振興会特別研究員 PD(京都大学))

本発表は、ラテン教父ヒエロニムス(347-420)とルフィヌス(345-410)の間で交わされた、オリゲネス『諸原理について』の翻訳に関する論争を検証することで、西洋古代末期の翻訳論の見取り図を描こうとするものである。そのために、まずはこれまでの翻訳学におけるヒエロニムスの扱いについて、次の2つの問題点を指摘したい。

第一に、翻訳史においてヒエロニムスの果たした役割の重要性は幅広く認められてはいるものの(たとえば、国連が決めた「世界翻訳の日」はヒエロニムスの命日の9月30日である)、そうした議論は多くの場合、彼の聖書翻訳にしか注目してこなかった(ウスティノフ『翻訳』31頁など)。しかしながら、実際には、聖書翻訳はヒエロニムスの翻訳仕事の一部でしかない。彼はそれ以前から、オリゲネス(185-255年)、カイサリアのエウセビオス(260-338年)、アレクサンドリアのディデュモス(310-398年)など、ギリシア教父たちの著作をラテン語に翻訳していたのである。ヒエロニムスの翻訳論の全体像を明らかにするためには、彼の聖書翻訳のみならず、ギリシア教父文学の翻訳にも注目しなくてはならない。

第二に、ヒエロニムスの翻訳論といえば、『翻訳の最高の種類について』と自ら題する『書簡57』にある有名な一節が紹介されるばかりで、彼がなぜそうした見解を持つに至ったのか、またその後その見解はどのように変化したのか、といった問題は等閑視されてきた(たとえば、マンデイ『翻訳学入門』30頁など。『書簡57』の邦訳は、高畑時子訳を参照)。この一節だけを見ると、ヒエロニムスは聖書以外には意識を、聖書には逐語訳を適用したように理解されてしまいがちである。しかしながら、実際にはこの原則に反する箇所がいくつもあることが分かっている。さらには、あたかもヒエロニムスが単独で翻訳論を築き上げたかのような理解は性急であろう。ヒエロニムスが翻訳論を戦わせていた論敵にも注目しなければならない。

以上の2つの問題点を解消するためには、オリゲネス『諸原理について』の翻訳をめぐる、論敵ルフィヌスの主張に耳を傾けることが重要である。この著作は、ルフィヌスによってもヒエロニムスによってもラテン語訳されているが、その方法論が好対照となっている。本発表では、この著作の翻訳をめぐる両者の主張を検証することで、ルフィヌスの翻訳論を紹介し、同時にヒエロニムスの翻訳論を再考したい。

**【参考文献】**

ウスティノフ、ミカエル(2008年)『翻訳:その歴史・理論・展望』白水社  
マンデイ、ジェレミー(2009年)『翻訳学入門』みすず書房

2 日目 C 会場 (L703) 11:30 – 12:00

司会 長沼美香子

C-9

訳語をめぐる憲法学と国際政治学—国権と国益の概念

大山貴稔(東京福祉大学)、河原清志(関西大学)

柳父章の追善供養として、訳語をめぐる学際的研究を法学・政治学の分野で展開することを趣旨とする。

翻訳という試みは、日本の政治／学術概念—そしてその言葉をめぐる思想や実践—の形成過程で重要な契機となってきた。そこで「国家 state」「民族 nation」「外交 diplomacy」といった近代国家の基礎を成す概念を対象に、翻訳という契機を視野に入れた歴史研究も行われている(與那覇, 2009; 岡本, 2014 等)。が、これら歴史研究の視座からの翻訳研究は明治日本の近代国家形成期に焦点を当てる傾向が強い。

本報告では戦後日本における政治／学術概念の翻訳に焦点を当てる。歴史的な文脈を踏まえ、憲法学における「国権 the sovereign right of the nation, state power」概念と国際政治学における「国益 national interest (以下 NI)」概念を対象に、現代日本に根づいた思惟様式を脱構築する契機として翻訳研究の可能性を提起する。

まず日本国憲法第9条、第41条の「国権」概念を取り上げる。国権は国家統治権(Herrschaftsrechte)を意味し、明治前半期から民権概念に対抗しつつ主張された。日清戦争後は国家の対外的膨張主義・日本主義傾向を推し進めた概念でもある。しかし GHQ が制定過程に深く関与した現行憲法では主権や統治権ではなく国権の訳語が採用された。憲法の諸学説の変遷と併せこの訳語選択事情を分析する。

次に、国際政治学／対外政策論の基礎とされる「国益 NI」概念を取り上げる。まず、「NI」が学術的概念として流入した1950年代の議論に関し、多様な視座から複数の訳語が当てられていた様子を明らかにし、総じて批判的な見解が相次いでいたことを指摘する。次に、「NI」概念を対外政策論の中核に据えた高坂正堯の議論を概観し、自主防衛論／対米不信の高揚と相俟って「国益」という単一の訳語が政治的概念として世に広まり、それが学界にも還流してきた様子を時代背景とともに分析する(60～70年代初頭)。以上を踏まえて、「国益」が政治的概念としての意味合いが濃厚なことを指摘し、「NI」をめぐる翻訳が「国益」に収斂していく過程で抜け落ちていった思惟様式＝弁証法的思考を明らかにする。そして、「NI」＝「国益」という定訳を見つめ直すことで、「NI」をめぐる思考の再活性化という問題提起を行う。

#### 【参考文献】

岡本隆司編(2014)『宗主権の世界史: 東西アジアの近代と翻訳概念』名古屋大学出版会  
與那覇潤(2009)『翻訳の政治学: 近代東アジア世界の形成と日琉関係の変容』岩波書店

2日目 C会場 (305) 15:40–16:10

司会 古川典代

C-10

中国語を母語とする熟達度の高い上級日本語学習者の日中口頭翻訳過程: 復唱課題と口頭翻訳課題を用いた実験的検討をもとにして

楊 潔氷 (広島大学大学院)

日本語と中国語(以下, 日中)の通訳については, 従来, 会議通訳等のデータを基に, 誤訳や情報処理を分析対象とする研究が主に行われている(e.g., 龐, 2015; 楊, 2005)が, 本研究は通訳の基礎研究として, 日中口頭翻訳過程について検討する。

翻訳過程には, 起点言語の理解, コード・スイッチング, 目標言語での訳出が含まれている。2言語間の口頭翻訳過程において, 起点言語が理解された後に, コード・スイッチングが行われるのであれば, 垂直的なアプローチが行われる。一方, 起点言語が完全に理解される前に, コード・スイッチングが行われ始めるのであれば, 水平的なアプローチが行われる, と考えられている(e.g., Macizo & Bajo, 2006)。前者は概念媒介ストラテジー, 後者は言語変換ストラテジーとも呼ばれている。従来, スペイン語と英語の口頭翻訳過程や中国語と英語の口頭翻訳過程に関する研究が盛んに行われている(e.g., 董, 2010; Dong & Lin, 2013; Macizo & Bajo, 2004)が, 共に漢字を使用する日中2言語の口頭翻訳過程は不明である。

そこで, 本研究は先行研究(e.g., Dong & Lin, 2013; Macizo & Bajo, 2006)をふまえ, 中国語を母語とする熟達度の高い上級日本語学習者を対象に, 日本語復唱課題と日中口頭翻訳課題を用い, 日中同根語とみなされる同形同義語及び, 誤訳されやすい同形異義語が文中にある場合の日中口頭翻訳過程を探索的に検証した。実験文は文節ごとに移動窓法により視覚呈示された。実験参加者には, 呈示された文節を1つずつ自己ペースで音読することが求められ, 音読した後, 文全体を復唱または口頭翻訳することが求められた。そして, 同形同義語と同形異義語が含まれる文節の音読時間(Reading time: 以下, RT)を比較した。その結果, 復唱課題と口頭翻訳課題のそれぞれにおける同形同義語のRTと同形異義語のRTの間に差がみられず, 復唱にかかるRTと口頭翻訳にかかるRTの間に差がないことが分かった。よって, 口頭翻訳を目的として日本語文を音読する際, 入力情報の意味理解が行われるが, 中国語とのコード・スイッチングは行われないことが推測できる。このことから, 熟達度の高い上級日本語学習者の場合, 日中口頭翻訳過程において, 垂直的なアプローチが行われると考えられる。

#### 【参考文献】

- Dong, Y. P., & Lin, J. X. (2013) Parallel processing of the target language during source language comprehension in interpreting. *Bilingualism: Language and Cognition*, 16 (3), 682-692.
- Macizo, P., & Bajo, M. T. (2006) Reading for repetition and reading for translation: Do they involve the same processes? *Cognition*, 99 (1), 1-34.



2 日目 C 会場 (305) 16:20 – 16:50

司会 古川典代

C-11

実践報告-日中大学間における通訳教育交流プラットフォームの構築にむけて

平塚ゆかり(順天堂大学)、呉 璿(北京語言大学)

本発表は両発表者が昨年度より取り組んでいる日中間の通訳実践/理論研究の協力プログラムの実践報告である。本発表者の目指すところは、日本と中国の通訳研究者/実務家教員が定期的に相互訪問を行い、共同理論研究や教育交流の実施を持続的に行うプラットフォームを構築することにある。

中国では 2013 年に提唱された「一带一路」政策の推進に伴い、通訳翻訳サービス産業は急速に発展しており、大学、大学院に設置された BTI (翻訳通訳学士学位 : Bachelor of Translation and Interpreting) MTI (翻訳通訳修士専門学位 : Master of Translation and Interpreting) コースは現在 200 校以上の大学に設置されている (平塚, 2018)。第 1 発表者 (平塚) は第 2 発表者 (呉) の依頼を受け、2017 年 11 月、2018 年 3 月と北京語言大学に通訳実践講義の一環として訪中、講演と通訳実践授業を行った。岩本 (2007) の報告などにあるように、中国の各大学が日本から講師を招へいし通訳実践授業を行うことはあるものの、現状では通訳領域の持続的な学術・教育交流のプラットフォームが構築されているとは言いがたい。現在中国では MTI を設置している各大学に海外から通訳翻訳領域の著名な研究者が頻繁に訪れ、通訳関連の国際会議やシンポジウムなどが定期的開催されている。今後は日本の通訳翻訳研究の知見も中国で積極的に発表し広めていく必要がある。通訳実践領域だけでなく通訳研究領域においても日本が中国と相互補完関係を築いていくことがアジア圏における通訳研究進展に寄与することに繋がると考える。

今回の発表では、第 1 発表者から中国全体の通訳教育の現状を紹介し、第 2 発表者から北京語言大学での MTI コースのコンセプト、教育プログラム、修了生の進路状況などの概要を紹介する。また第 1 発表者が実際に行った授業、講演における通訳訳出データスクリプトを提示し、中国語母語話者の日本語訳出における特徴と問題点を言語的側面に焦点を当て分析した結果を発表する。発表では学会員からも意見を頂戴し、現在発表者が共同で進めている日中通訳教材開発や通訳プログラムの再考に繋げていきたい。

#### 【参考文献】

岩本明美 (2007) 「北京語言大学日中同時通訳修士課程における通訳実習の特徴と課題」『通訳研究』

7, 231-252.

平塚ゆかり (2018) 「中国の大学院における通訳翻訳教育:MTI コースにおける日中学術・教育交流の

可能性」『順天堂グローバル教養論集』3, 73-79.

1 日目 D 会場 (306) 14:00 – 14:30

司会 松下佳世

D-1

Acting at/as the cultural borders: professional self-conceptualization of literary translators in Russia

Elena Baibikov (Kobe City University of Foreign Languages)

Cultures may come in contact in various ways. It might take the form of a direct contact between populations or occur as an indirect contact through the mediation of cultural goods, such as movies, books or works of art. (Even-Zohar, 2010) Those individuals, who serve as mediators of cultural goods, such as literary translators, usually are viewed as major actors at the cultural borders, creating opportunities for cross-cultural encounters.

The term ‘cultural border,’ being physical in origin, often connotes the border/ boundary of a state or a nation; it is assumed that if two national communities or “societies, identified with two distinct cultures come in contact, a cultural border is expected to form between them.”(Heewon Chang, 1999) That is, an essentialist view of culture presumes high degree of cultural homogeneity and an existence of fixed cultural borders being formed by cultural differences.

The implied equation between a territory and a culture has prevailed in anthropological discourse and in translation studies too it was common to most academic approaches. (Anthony Pym, 2003) Following a “cultural turn” in 1980s translators have come to be conceptualized as agents of communicative process and cultural change, actively acting at so called cultural borders. However, little research has explored what translators themselves say about this aspect of their work and how they conceptualize their professional action.

A *translator approach* and re-examination of the essentialist view on culture provide a conceptual framework for this case-study. An analytical framework is adopted, based on the *conceptual metaphor* theory by American cognitive linguist George Lakoff (Lakoff, 1996). I will examine here the way translators understand and conceptualize their professional action within the paradigmatic context of borders and distance between cultures. The study is also to assess the differences between the conceptual and operational levels of translation.

Itamar Even-Zohar, “Laws of cultural interference” in Papers in culture research. Itamar Even-Zohar (Tel Aviv: The Culture Research Laboratory, 2010) [Electronic Book]

Heewon Chang, “Re-examining the rhetoric of the “cultural border.” Electronic Magazine of Multicultural Education, 1(1), 1999

Anthony Pym, “Alternatives to borders in translation theory” in Translation, Translation, ed. Susan Petrilli (Amsterdam/ New York: Rodopi, 2003)

George Lakoff, “The contemporary theory of metaphor” in *Metaphor and Thought* (second edition) ed. Andrew Ortony (Cambridge: Cambridge University Press), 1996, 202-251.

1 日目 D 会場 (306) 14:40 – 15:10

司会 松下佳世

D-2

A short comparison of the translation style of *Aeneid* II between Friedlich von Schiller and William Wordsworth—Regarding the thoughts about human destiny of the two poets—  
高畑時子(Tokiko Takahata) (Kindai University Technical College)

This theme tries to clarify the translation styles of two great poets in late 18<sup>th</sup> – early 19<sup>th</sup> century in western Europe. Friedlich von Schiller (1759 – 1805) and Sir William Wordsworth (1770 – 1850) both translated the *Aeneid*, the Latin heroic epic of the Roman poet Virgil (in Latin P. Vergilius Maro, 70 B.C. – 19 B.C.). Schiller translated the *Aeneid* I – IV into German and Wordsworth translated it into English. Although the countries in which they lived and the languages they used are different, their translation tendencies had many similarities and of course some differences. By comparing the poets' translation works, this theme attempts to disclose their translation methods and each poet's features.

This oral presentation will focus on the second book of the *Aeneid*, which both poets translated in a relatively free style apart from the hexameter's strict rule in the original ancient work. Instead of the dactylic hexameter of the original work, Schiller adopted a "stanza of eight verses" (in Italian "ottava rima") and Wordsworth adopted the iambic pentameter with "heroic couplet" that was mainly used by Dryden and sometimes also the mixed "heroic triplet"; these styles were their countries' respective national literature styles.

In addition, in the second book of the *Aeneid*, whose main theme is the fall of the Troy due to the Trojan horse, Virgil specifically depicted the fate or destiny of several important characters and the "*dei*" (gods) and "*numina*" ("the Powers" in Wordsworth's translation) deeply in his work. The translations by Schiller and Wordsworth reflect the characteristics of each poet. Schiller did not translate literally, particularly passages where destinies or fates are mentioned. For example, he translated the original verse "*quo res summa loco*," (2,322) into "Mein Panthus, was beschließt das zürnende Geschick?" even though the original verse included no mention of "fate."

Wordsworth has similar translation tendencies; in his translation work, he tried to depict not only Virgil's style and vocabularies truly but also his own ideas, thoughts, or spirit and he did not render the passages relating to fate literally. For example, he translated the original sentence "*si periturus abis, et nos rape in ominia tecum*;" (2,675) into "If thou, departing, be resolv'd to die; Let us be partners of thy destiny;" (908). He emphasised human's "destiny" and depicted it in detail even though it does not appear in the original work. Moreover, he personified it as "this wretched fate" in contrast to the original work and described it in a characteristic way of "the spontaneous overflow from emotions" by composing poetries. In this manner, Schiller's and Wordsworth's thoughts about human destiny are reflected in their translations.

1 日目 D 会場 (306) 15:50 – 16:30 / 2 日目 D 会場 (306) 12:00 – 13:45

ポスター発表

P-1

英語文学、その邦訳、並びに映画化に見られる「視点」の変容—カズオ・イシグロの *The Remains of the Day* を題材に—

加藤久佳(愛知工業大学)

本発表では、ノーベル賞文学賞作家 カズオ・イシグロの作品 *The Remains of the Day* (『日の名残り』)を題材に、原作とその邦訳、並びに、映画版における「視点」の変容について検証する。

ブッカー賞を受賞した本作品における「語り手」は、主人公スティーブンスである。スティーブンスは、英国貴族の主人に仕える「偉大な執事」である。「品格」を是とするあまり、自分の感情を抑制し、表に出すことがない。事実を客観的に語らないこの語り手が見せる世界は、どのように邦訳され、映画化されているか。作品終盤で、イシグロは、スティーブンスが死守してきた品格を崩そうとした、という。これにより、スティーブンスの本心が一瞬、垣間見られる。偉大な執事を目指す主人公であり語り手であるスティーブンスの「視点」から、世界はどのように見られるのか。邦訳、英語版における変容はあるのか。

本作品以前のイシグロの作品は、幼少時を過ごした日本が舞台であった。本作品においては、舞台を英国に移し、登場人物も概ね英国人である。テーマが、「評価から逃れ得ない」である点では、前作品 *An Artist of the Floating World* (『浮世の画家』)を引き継いでいるが、前作品までにおいては日本的要素が前面に出ていた。本作品においては、イシグロは、より「普遍的」なものを描くことを意識したという。「普遍」性を意識した結果、「英国」での物語を描いたイシグロは、同時に「普遍的であるとされる『英語』への抵抗」を作品に散りばめている。語り手の英語は、平易でありながら、英語から異言語に翻訳されやすいこと、さらには、映像化されやすいことを考え、紡がれている。

本発表においては、ノーベル賞を受賞したイシグロの作品群の特徴にも言及する。未邦訳の作品(作家活動は、1981年以降)を含め、2015年に発表した *The Buried Giant* (『忘れられた巨人』)まで、15作品と比較的寡作のイシグロは、これからどのようなイシグロ・ワールドに挑戦するのだろうか。作品ごとに主題を変えてきたイシグロの「普遍」を探る。

1 日目 D 会場 (306) 15:50 – 16:30 / 2 日目 D 会場 (306) 12:00 – 13:45

ポスター発表

P-2

**同時通訳における訳出遅延の短縮に有用な訳出方略の獲得の効率化**

蔡 仲熙(名古屋大学)、笠浩一朗(三重短期大学)、松原茂樹(名古屋大学)

同時通訳では、話者の発話に追従して通訳を遂行するという時間的制約が存在する。文構造に大きな差異が存在する日本語と英語の間の通訳では、通訳者は何らかの方略を用いることにより時間的制約に対処していると考えられる。このような同時通訳の訳出方略を獲得し体系化することができれば、通訳の実践的教育の支援に活用することができる。

同時通訳の訳出方略については、これまで様々な研究が存在する。例えば、起点言語と目的言語の構造的差異に着目して訳出パターンを整理した研究や、順送りなどの訳出技法に関する実例を用いた分析などが存在する。広範な訳出方略の獲得のために、大規模データを利用することが考えられる。しかし、それらを人手で分析するには膨大な労力を必要とするという問題がある。

そこで本発表では、大規模通訳データからの訳出方略の効率的な獲得に向けて、訳出方略が使用された訳出を含む対訳事例を自動検出する手法について述べる。本手法は、同時通訳における訳出遅延の短縮に効果のある方略を獲得対象とし、同一原文に対する異なる通訳者による訳出を利用するというアプローチを採用する。具体的には、異なる通訳者による訳出において、訳出遅延時間に有意な差が存在し、かつ、訳語の語順や訳文の構造等の点で特徴的な訳文を、方略を含む訳出事例の候補として出力する。出力された訳出事例を訳出方略の獲得対象として限定することにより、訳出方略獲得の効率化が期待できる。

本手法の利用可能性を確認するために、同時通訳データベースに収録されている講演のうち、英語講演 22 講演、及び、講演ごとに 4 人の通訳者による通訳データを用いて対訳事例の検出実験を行った。使用したデータには、200msec.の無音区間で分割された発話単位の対訳対応、及び、単語単位の対訳対応が付与されており、本研究ではこれらを利用して、文単位の対訳対応を定めた。実験では、文単位の対訳対応に注釈付けされた訳出遅延の短縮に有用な訳出方略データを用いて評価した。

1 日目 D 会場 (306) 15:50 – 16:30 / 2 日目 D 会場 (306) 12:00 – 13:45

## ポスター発表

P-3

### 通訳実務者、研究者の国際学会 Critical Link International

津田 守(名古屋外国語大学)、水野真木子(金城学院大学)、毛利雅子(豊橋技術科学大学)、岡部純子(大阪大学)、大野直子(順天堂大学)

Critical Link International (CLI) は、社会、法律、医療などの分野を包括する意味でのコミュニティ通訳の発展に寄与する団体であり、3年に一度、世界各国から実務家、ユーザー、関連企業、研究者が集う国際会議を開催している。1992年、カナダでオタワ大学の Brian Harris 教授が、主として同国内のコミュニティ通訳の大会を開催した時に Critical Link が生まれた。その後 2000年に Critical Link Canada: National Council for the Development of Community Interpreting と呼ぶようになり、さらに 2010年には Critical Link International と名称変更した。

当初はカナダ中心の小さな集まりであったが、現在は世界中に会員を擁するコミュニティ通訳者の団体になっている。幾多の名称変更はあったが、CLI は一貫して社会、法律、医療などの分野のコミュニティ通訳の発展に寄与する非営利団体の立場を守っており、また、音声通訳者と手話通訳者を常に連携させている。

これまで CLI は、コミュニティ通訳者の行動規範の作成に尽力、実践報告と研究発表の場を提供、通訳者トレーニングに関するワークショップを開催、プロフェッショナル化を推進することにより職業としてのコミュニティ通訳者の認知向上に貢献するなどしてきた。

また、3年に一度開催される The Critical Link 国際会議は、コミュニティ通訳の実務家、研究者などが最新の知見を共有する絶好の機会となっている。過去の開催地としては、スウェーデン(2003)、オーストラリア(2007)、イングランド(2010)、カナダ(2013)、スコットランド(2016)などがあり、2019年6月にはアジア初の開催地として東京が選ばれた。それが Critical Link 9 である。

本特別発表では、CLI についての説明の後、これまでの大会に参加、発表したことのある研究者や実務家から、「国際大会発表の意義」「参加で印象に残ったこと」「Critical Link 9 に期待すること」というテーマでそれぞれの経験を共有していただくことで、コミュニティ通訳研究の現状や CLI に関する理解を深めることを目的としている。

Critical Link 9 が研究者と実務者をつなぐ場(Link)となり、多くの参加者と共に、発表やイベントを通じて分野や国を越えて交流できる意義をもたらすこと、2020年の東京五輪を前に、日本におけるコミュニティ通訳が盛り上がり発展する契機のひとつになることを願っている。

1 日目 D 会場 (306) 15:50 – 16:30 / 2 日目 D 会場 (306) 12:00 – 13:45

ポスター発表

P-4

### 複数の報道機関による「板門店宣言」の日本語全訳分析

申 周和(立教大学)

2018 年 4 月 27 日、韓国と北朝鮮の軍事境界線にある「板門店(パンムンジヨム)」で、韓国の文在寅(ムン・ジェイン)大統領と北朝鮮の金正恩(キム・ジョンウン)国務委員長による 11 年ぶりの南北首脳会談が行われた。会談後、両首脳は、南北関係の改善や朝鮮半島の非核化に向けて韓国と北朝鮮がともに協力していくという内容が盛り込まれた合意文であり、会談が行われた場所の地名にちなんだ「板門店宣言」に署名した。板門店宣言の原文は韓国側が公表しているものと、北朝鮮側が公表しているものを合わせて 2 つのバージョンとなっているものの、両バージョンの相違点は韓国と北朝鮮の国名を並べる順番や、単語と単語の間隔の開き方、「往来」と「来往」など漢字語の使用の違いなどに止まっており、文章の意味やニュアンスに大きな影響を与えるものは見当たらない。現在、韓国と北朝鮮は、朝鮮戦争と南北の分断で離れ離れになっている離散家族の再会や鉄道路線の連結、北朝鮮の道路整備、南北の選手団によるバスケットボールの親善試合の開催など、板門店宣言で合意された事項を次々と履行しており、同宣言は今後の南北関係の進展において重要な役割を果たすものと考えられる。

板門店宣言は、当事国の韓国と北朝鮮に限らず、当該事案に対する周辺国の関心度も高いことから、宣言文が公表された当日に複数の報道機関によって素早く翻訳され、一部のメディアではその全文を「板門店宣言・全訳」というタイトルで自社のホームページに掲載した。しかし、韓国と日本の報道機関 10 社がそれぞれ公表した板門店宣言の日本語訳を比較・分析したところ、全訳として公表されているにも関わらず、10 社のうち 9 社の訳文で一部の箇所が一律的に省略されていることがわかった。また、板門店宣言に対しては、韓国政府が特設のホームページを通して日本語、英語、中国語など多言語に翻訳された宣言文の全文を掲載しているが、韓国政府による訳文とその他メディアによる訳文にはいくつかの違いが存在する。

今回の発表は、板門店宣言の訳文について筆者が調査した内容や疑問点をほかの研究者と共有し、潜んでいる問題を洗い出すとともに、議論や意見交換を行う機会にしたい。

1 日目 D 会場 (306) 15:50 – 16:30 / 2 日目 D 会場 (306) 12:00 – 13:45

ポスター発表

P-5

### 解釈学の視点から見た伊藤漱平「好了歌」の翻訳研究

呉 珺 (WU JUN) (中国北京語言大学東方語言文化学院)

「好了歌」及び「好了歌注」の意味をどのように理解し解釈するかということは、「紅樓夢」の主旨、また作者である曹雪芹の思想を理解し解釈することと深くかかわっており、「紅樓夢」という作品自体を深く理解するための重要な視点となっている。これまでに3名の学者が伊藤漱平の「好了歌」日本語訳に関する研究を行ってきたが、賛否両論の両極端となっている。「好」及び「了」を「には」と「とは」に訳すことに対して、目的語の読者は原文の読者と同じ気持ちを感じることができるか否か、「好」と「了」の示している意義をどのように訳出するのか、というところに議論の焦点がおかれているのである。よって、本研究では解釈学の翻訳理論に基づき、「好」、「了」を「には」、「とは」と訳す合理性を考察したと同時に、伊藤漱平が選択した翻訳方法の背景にある要素を探ってみようとしたのである。考察したところ、「好了歌」及び「好了歌注」の伊藤訳は一般的に用いられている訓読みの翻訳方法ではなく、日本文化との類似点を探し、日本の読者が読みやすい同化的翻訳の手法を用いるなど、多くの考慮を重ねたことが分かった。「原文で使用された並列的韻律を用いた対句を表現することが出来なかったものの、日本の連句表現の中で多くの参加者に「座」の雰囲気醸し出していると評価される作品となった」(伊藤 2003)。結論としては、原文の韻を踏む特色を保持しているものの、「には」、「とは」には具体的な意味が含まれていないため、「好」、「了」の豊富で且つ深い意味を表すことは非常に難しく、一部の内容が欠落しているとも言える。「好了歌」を「にはとはづくし」と訳すことは妥当なのか、結論は人によって異なっているが、翻訳の「枠」をどのようにして決めるか、という点に着目する価値があると考える。ご参考に過ぎないが、「にはとはづくし」の形式を保ち、「好了歌」の詩部分には括弧を用い原文の漢字である「好」と「了」を残し、且つ対話部分では「好了歌」の直訳に加え「にはとはづくし」の振り仮名を加えるというように訳しなおせば、日本の読者に対して原文に含まれている意味を全て伝えることができ、日中両言語特有の優れた点を共存できる選択だと言えよう。発表では専門家からも意見をいただき、より完成度の高いへとつなげていきたいと願っている。

#### 【参考文献】

伊藤漱平(2003)「対異文化理解的深化」『文学、历史、传统与人文精神：在日中国学者的思考』9-10

呉珺(2017)「伊藤漱平红楼梦回目翻译研究」,『红楼梦学刊』6, 314—334.



1 日目 D 会場 (306) 16:40 – 17:10

司会 水野 的

D-4

#### 翻訳初学者が生じる誤りの経時的変化の分析

田中加英美(京都大学大学院研究室事務)、田辺希久子(フリー翻訳者)、藤田篤(情報通信研究機構)

翻訳の需要が近年ますます高まる中、翻訳者の養成にも高い関心が寄せられている。翻訳教育においては、学習者の翻訳産出能力を高めるだけでなく、最終的な翻訳物を完成させるまでのプロセスや各時点における種々の判断基準を教授することによって翻訳者としての実践的な能力を養うことも期待されている。特に、翻訳の作成、校閲、修正、という実務翻訳のプロセスに沿った形式の翻訳実習が担う役割は大きい。翻訳実習においては、翻訳の添削の際に個々の誤りを一貫して判定するとともに、誤りの全体像を体系的に教授する必要がある。これまでに、そのような用途を想定して誤りの分類体系が作成されてきた(豊島ら, 2016)。

本発表では、翻訳学習者が生じる誤りが学習過程においてどのように変化するか、より具体的には、添削を通じて指摘を繰り返し受けることによって低減が可能な誤りの種類、逆に低減しづらい誤りの種類について述べる。まず、レジスタの違いによる誤りの傾向の違いと経時的な変化を切り分けるため、ある大学において学部生を対象とした同一形式の翻訳実習講義を 4 学期に渡って実施し、連続する 2 学期に当該講義を受講した 17 名の翻訳データを収集した。当該講義では、学習者が翻訳した文書における誤りを、豊島ら(2016)が構築したカテゴリ体系を用いて分類し、学習者に対して適宜教示した。そして、1 学期目と 2 学期目に作成した同一レジスタの翻訳文書を比較し、各カテゴリの誤りの変化量を算出して分析した。

この分析の結果、豊島ら(2016)の体系における X7【用語の訳出誤り】、X1【原文内容の欠落】、X8【コロケーション誤り】、X14【レジスタ違反】の 4 つのカテゴリの誤りについては、1 学期目に頻繁に指摘を受けた学習者が、2 学期目には減らせたことが確認できた。一方、X3【原文内容の歪曲】については、対象者全員が 1 学期目に頻繁に指摘を受けたにもかかわらず、17 名中 7 名は 2 学期目に減らせていなかった。豊島ら(2016)、山本ら(2016)の結果と同様、X3 は全カテゴリの中で最も頻繁に生じる誤りであった。そこで、X3 に分類された誤りを、X3a【単一の語句に関する誤り】、X3b【2 つの語句の修飾関係の誤り】、X3c【その他の歪曲】に細分類して各々の増減を分析した。本発表では、具体例を示しつつ、これらの誤りが低減できない原因について考察するとともに、翻訳実習講義における教授法の改善案について議論する。

#### 【参照文献】

豊島知穂・藤田篤・田辺希久子・影浦峽・Anthony Hartley (2016)「校閲カテゴリ体系に基づく翻訳学習者の誤り傾向の分析」『通訳翻訳研究』16:47-65.

山本真佑花・田辺希久子・藤田篤 (2016)「翻訳学習者の学習過程におけるエラーの傾向の変化」言語処理学会第 22 回年次大会発表論文集, pp. 865-868.

1 日目 D 会場 (306) 17:20 – 17:50

司会 水野 的

D-5

学習者がプロ翻訳者に近づくには？—プロ翻訳者と学習者の翻訳プロセス比較

大西菜奈美(関西大学 M)

翻訳学習者向け共同翻訳プラットフォーム『みんなの翻訳実習』の「校閲カテゴリ」を用いて学習者の翻訳エラーを分類すると、X3「原文内容の歪曲」が他のエラーより突出して起こる(豊島 et al., 2016)。そして、これはニューラル機械翻訳のエラーを分類しても同様の結果となることがわかった(山田&大西, 2018)。これより、機械翻訳による翻訳技術が向上しても、このエラーを処理できることは翻訳者に必要な力であることが示唆された(ibid.)。したがって、X3「原文内容の歪曲」を処理できるようになることで、学習者は翻訳者としての能力を養うことが可能だと考えられる。そこで、大西ら(2017)は X3「原文内容の歪曲」の発生原因を翻訳プロセスの観点から分析し、詳細原因としてサブカテゴリ(1)-(5)を定めた。X3「原文内容の歪曲」の大多数のエラーはサブカテゴリ(1)-(4)に当てはまる。これらのエラーは原文内容を取り違えたために起きる、語学力の欠如に起因するエラーである。しかし、(5)「適切な訳を求めて」はそれらのエラーとは性質を異にする。このエラーは、訳語決定にあたり、原文に注意を向け、正しく理解できていたにも関わらず起きるエラーである。つまり、(5)「適切な訳を求めて」は原文内容理解を誤ってしまう語学力の問題ではなく、原文の内容を理解した上で訳の作成に失敗する、翻訳プロパーな問題であると捉えられる。よって、X3「原文内容の歪曲」の中でも特に(5)「適切な訳を求めて」を対処できる能力を養うことで、学習者が語学運用能力だけでなく、翻訳特有の問題を解決できるプロ翻訳者へと近づけると仮定できる。

そこで本研究では、同様の追試実験をプロ翻訳者に対して行い、彼らが(5)「適切な訳を求めて」のエラーがつく箇所をどのように対処しているのかを調査する。具体的には、学習者でエラーがついてしまう箇所を中心に、プロ翻訳者にはどのような *behaviour* (操作や対処法)が見られるのか、またそれが学習者とはどう違うのかを、訳出過程の録画記録と回顧インタビューを通して分析する。訳出過程記録では特にサーチや修正の時間や回数等に着目し、回顧法インタビューでは迷いが見られた箇所、修正を行った箇所などについて質問し、その理由を明らかにする。この結果を踏まえて、学習者がプロ翻訳者に近づくために必要なコンピテンスの確立を目指す。

#### 【参考文献】

- 大西菜奈美・山田優・藤田篤・影浦峯(2017)「翻訳学習者が誤訳をする理由: MNT-TT の校閲カテゴリ「X3」から見る学習者の訳出プロセスと学習効果」『通訳翻訳研究への招待』 Vol. 18, pp. 88-16.
- 豊島知恵・藤田篤・田辺希久子・影浦峯・Hartley, A. (2016)「校閲カテゴリ体系に基づく翻訳学習者の誤り傾向の分析」『通訳翻訳研究への招待』16, 47-65.
- 山田優・大西菜奈美(2018)「それでもが学生はポストエディターになれるのか? ニューラル機械翻訳(Google NMT)を用いたポストエディットの検証」『言語処理学会第 24 回年次大会 発表論文集』, pp738-pp741.

2日目 D会場 (306) 9:30-10:00

司会 佐藤美希

D-6

「置換訳」と「翻訳」による英文再生度の違い

守田智裕(名古屋市立向陽高等学校)、石原知英(鹿児島大学)

近年の英語教育では、「英語の授業は原則英語で」(文部科学省,2009)を行い、外部試験によって4技能の力を量的・画一的に検証しようとする動きが続いている。これと対照的に教育現場から姿を消しつつあるのが「訳」である。従来「訳」は否定的な学習活動とされてきたが、言語教育研究・翻訳研究ではその教育的効果を再評価する研究が行われている(Cook, 2010; Laviosa, 2014)。Ishihara and Ono (2015)は内容理解活動と比較して、訳活動によって英文の再認度が変化したことを報告しており、英語教育が目的としている読解技能の育成に訳が貢献する可能性を論じた。

日本人英語学習者が行う「訳」は、「置換訳」と「翻訳」に分類できる(柳瀬,2016)。「置換訳」とは試験等で学習者の理解度を測るために方便として用いられる訳で、受験者は起点テキストの表層構造を、定められた訳し方(訳出公式)に則って訳すことが求められる。それに対して「翻訳」は、起点テキストに埋め込まれている意味を回復して、読み手への効果を意識しながら行う訳出で、しばしば「省略」「追加」「言い換え」といった方略が見られる。この分類は、あくまで理念的な区分であるが、機能的翻訳理論の立場から両者の訳出目的(スコpos)を設定することによって操作的に定義をすることが可能である(守田,2016)。しかし、この訳出条件によって学習者の翻訳プロセスにおける認知や理解、あるいは訳文の質がどのように異なるのかについては、これまで十分な実証的研究が行われていないようである。

本研究は、これらの違いによって英文の再生度に影響が出るかどうかを調査した。高校2年生80名を調査対象とし、2集団に分けた。そして片方に「置換訳」条件で訳出をさせ、もう片方には「翻訳」条件で訳出をさせた。その後、起点テキストの筆記再生課題に取り組みせ、両者の再生課題の結果を分析した。当日の発表では、「翻訳」と「置換訳」の再定義、および実験結果の考察・解釈を主に行う。

参考文献

Cook, G (2010) *Translation in Language Teaching: An Argument for Reassessment*. Oxford University Press

Laviosa, S. (2014) *Translation and Language Education: Pedagogic approaches explored*. Routledge. New York: America

Ishihara T., Ono A. (2015) The Effects of Literary Texts on Students' Sentence Recognition: Translation Tasks and Comprehension Tasks. In: Teranishi M., Saito Y., Wales K. (eds) *Literature and Language Learning in the EFL Classroom*. Palgrave Macmillan, London

守田智裕 (2016) 「英語教師志望者の「英文和訳」と「翻訳」—トリビアル・マシンとノントリビアル・マシン

—』『言葉で広がる知性と感性の世界—英語・英語教育の新地平を探る—』(pp.179-188) 溪水社  
文部科学省 (2009) 「高等学校学習指導要領解説外国語編英語編」 開流堂出版

柳瀬陽介 (2016) 『「訳」の概念分析』『言葉で広がる知性と感性の世界—英語・英語教育の新地平を

探る—』(pp.190-211) 溪水社

2 日目 D 会場 (306) 10:10 – 10:40

司会 佐藤美希

D-7

英語教育における翻訳の意義と役割—TILT 研究の論点整理—

石原知英(鹿児島大学)、守田智裕(名古屋市立向陽高等学校)

本発表は、言語教育における翻訳のあり方を再評価しようとする TILT (Translation in Language Teaching) の議論について、通訳翻訳研究における英語教育の視点と、日本の英語教育学研究における翻訳の視点の両面から捉え直し、その論点を整理しようとするものである。

TILT という用語は、2010 年に出版された Guy Cook の *Translation in Language Teaching: An Argument for Reassessment* (Oxford University Press) が端著となり、一部の通訳翻訳研究者の間に浸透した。もちろんそれ以前から、通訳翻訳研究の分野では、とりわけ学部レベルの基礎的な語学力向上を目標の一つに据えた様々な実践研究が行われてきていたのであるが、TILT の導入により、こうした翻訳の基礎トレーニングとしての語学教育のあり方が、より明確に、研究・実践の対象として位置づけられたとみることができる。一方、英語教育学の分野では、目標言語による意味のやり取りの重要性が注目される中で、教室から締め出しきれない母語(および訳)は、ある種の必要悪としてその存在が黙認されてきていた。これが TILT の導入により、より積極的に学習者の母語を活用しようとする考えにシフトしつつあると考えられる。ただし、英語教育学研究の分野では、通訳翻訳研究で取り扱われているほど TILT の概念が十分に浸透していないようである。

そこで本発表では、英語教育の文脈で TILT の概念を論じるために、翻訳タスクをいかに捉えるかという点と、言語教育の目的に翻訳能力を位置づけることができるのかという 2 点を明確にする必要があることを指摘したい。

英語教育学研究と通訳翻訳研究の間で、この 2 点について認識の齟齬があり、それが建設的な議論の成立を阻害していると考えられる。翻訳タスクの捉え方については、英語教育の文脈では、主に内容理解の度合いを表出する手段として、主にリーディングの指導やテストで用いられているのであるが、翻訳研究においては、より創造的な産出の技能、あるいは仲介能力として位置づけられており、その齟齬が知見の蓄積を難しくしていると考えられる。目的論に関する議論では、言語教育の目的の一部として翻訳能力を位置づける考え方がある一方で、翻訳タスクを言語習得の手段として捉える見方もあり、その両者の議論が峻別されていないことが、建設的な議論の妨げになっていると考えられる。当日は、これらの論点を整理した上で、今後の研究の展望についても言及したい。

2日目 D会場 (306) 10:50-11:20

司会 佐藤美希

D-8

日本人英語学習者の「ことばへの気づき」を促す訳タスクに関する研究—タスクとしての「訳注」に着目して—

水島祐人(広島大学大学院教育学研究科博士前期課程)

近年の英語教育では、学習者の母語である日本語の使用は軽視されがちであり、とくに日本語の使用を伴う「訳」は時間がかかりすぎる、英語を理解する際に日本語を介した癖がついてしまうなどの理由から、あまり肯定的に捉えられていない。一方、大津(2008ほか)は母語と外国語を比較・分析することで明らかになる両者の相対性、さらに個別言語を超えた言語一般、つまり「ことば」の構造・意味・はたらきに関するメタ的意識である「ことばへの気づき」を学習者に促すことの重要性を説いている。母語と外国語についてのことばへの気づきは、学習者の言語習得と「ことば」そのものに関する学びにつながる点で重要である。さらに石原(2010)が述べるように、外国語と母語に関することばへの気づきを促すタスクの一つとして、両者を意識的かつ繰り返し比較しながら行う「訳」が有効だと言える。

訳を通して「ことばへの気づき」のようなメタ言語的意識を育むことの重要性は近年の教育訳研究からも主張されている(染谷・河原・山本, 2013ほか)。しかし、ことばへの気づきを促す訳タスクの開発は未だ十分でない。このような訳タスクの開発は、学習者が何らかの目的意識を持ちながら課題を遂行し、その過程においてことばへの気づきが自然に促されうる点で重要である。そこで本論では、学習者自身が作成した訳文に対して「訳注」を付けるタスクを与え、タスク遂行を通して促されることばへの気づきを明らかにする。訳注は、原文に盛り込めないものの、読者にとって興味深い、または必要であると翻訳者が考える情報を追加するテキストである(Buendia, 2013)。「読者のために訳注を付ける」という目的意識を持って学習者がタスクに取り組むことで、自分の訳を観察・分析し、より自然に「ことばへの気づき」が促されると考えられる。本発表では、日本人英語学習者が作成した訳注と自由記述コメントのテキスト・データを「ことばへの気づき」の観点から分析し、その結果を示す。

【参考文献】

Buendia, C. T. (2013). Listening to the voice of the translator: a description of translator's notes as paratextual elements. *Translation & Interpreting*, 5 (2), 149-162.

石原知英 (2010) 『翻訳における言語意識 —プロセスの記述とプロダクトの評価をめぐって—』, 未刊行 博士論文 広島大学.

大津由紀雄・窪園晴夫 (2008) 『ことばの力を育む』 慶応義塾大学出版会.

染谷泰正・河原清志・山本成代 (2013) 「英語教育における翻訳(TILT: Translation and Interpreting in Language Teaching)の意義と位置づけ」 語学教育エクスポ 2013

2 日目 D 会場 (306) 15:40 – 16:10

司会 田中深雪

D-10

**日本の高校で字幕翻訳を活用した授業を実施した際に見られる生徒への影響—学習に対する意識と学力の変化に着目して—**

高田 愛 (関西大学大学院外国語教育学研究科博士課程前期)

近年では、日本での英語教育において翻訳を取り入れようとする研究も増えてきた。ガイ・クック (Guy Cook) の『英語教育と「訳」の効用』(Translation in Language Teaching: An Argument for Reassessment)の中でも、今後は翻訳をどういった形で外国語教育に取り入れていくかが重要とされている。しかし、日本ではその翻訳を使った活動の形もまだ確立されてはいない。特に高校での授業ではコミュニケーションに重きが置かれ、翻訳を積極的に取り入れている授業はほとんど無いように感じる。そこには、昔からの文法訳読法に対する退屈なイメージや、授業時間の制約などの事実があると思われる。また、生徒のレベルや実施環境の制約からか、実際の研究でも大学生を対象としたものがほとんどで、高校生を対象としたものはほぼ見つからない。

そこで、高校の英語教員である筆者が、実際に実技系の英会話授業の中で字幕翻訳を取り入れた活動を実施し、経過を観察した。字幕翻訳を採用した理由の一つは、映像を見せ、リアルな会話を訳すことで、モチベーションの向上・維持や文法を丁寧に考えることにつながると期待したからである。教材は、NHK で放送されていたアニメ「リトル・チャロ」を使用し、授業手順は、田中(2010)で紹介された FonF(フォーカス・オン・フォーム)の形を参考にして、生徒に字幕翻訳をさせた後に文法の説明等を行った。授業時間数や教室環境の制限はあったが、毎回映像を鑑賞して実際の会話をイメージできる状態を作ったことで、生徒からは一定数の評価は得られた。

本発表では、字幕翻訳を取り入れた授業のプランニングから実施までのプロセスを提示し、どのように運営されたかを紹介する。特に、字幕翻訳を採用したクラスとそうでないクラスの学習意識を比較すると、前者の方が間ふさ子ら(2012)の言うように生徒のモチベーションが上がるという予測のもとで、学力向上にも影響すると考えた。そこで、授業の効果を測るために行ったプレ・ポストでの学力テスト(英検3級)と英語学習に関する質問紙調査の結果もそこに含める。さらに、その分析結果から、読み取ることのできる生徒への影響や今後の授業運営に関する課題等も議論したい。

**【参考文献】**

- Cook, G. (2010). *Translation in Language teaching*. Oxford University press. [斉藤兆史・北和丈(訳, 2012) 『英語教育と「訳」の効用』 研究社]
- 田中淳子(2010)「自分の考えや気持ちなどを英語で書こうとする意欲を高めるために、文法指導と言語活動を効果的に関連づけた指導方法を探る」、『佐賀県教育センター研修報告要約』平成 22 年度, pp93-100
- 間ふさ子, 甲斐勝二, 張璐, 王毓雯(2012)「字幕制作を使った語学学習(中国語)の構想と実践」, 福岡大学人文論叢, 43/4, 753-780, 2012 年 3 月

D 会場 (306) 16:20 – 16:50

司会 田中深雪

D-11

翻訳コンピテンスとは何か、それはどのように規定されているか：翻訳教育カリキュラム開発に向けたレビュー

朴 恵(東京大学大学院博士後期課程)、影浦 峡(東京大学)

翻訳コンピテンスとは、翻訳に必要な知識とスキルの基盤システムであり(PACTE, 2003)、翻訳研究・翻訳教育研究の世界では特に 1980 年代後半から注目され始めている。

現在、世界各地で広がりを見せている専門職翻訳者養成のための大学学部・大学院レベルでの翻訳教育コースの目標は、ひとまずは、そのコンピテンスを養うことと言える。翻訳コンピテンス(翻訳力とも呼ばれる)、およびその拡張版と言える「翻訳者コンピテンス(翻訳者力とも呼ばれる)」に関する研究の多くは、「翻訳コンピテンスとは何か」という「what」を定義することにどまり、「翻訳コンピテンスをいかに養うか」という「how」の問いに深く触れていない。

その結果、翻訳教育現場では、科目構成という狭義のカリキュラムがあるものの、何をどのように指導するか具体的な方法は個々の教員に依存しがちであり、それがわからない教員もいる。とりわけ翻訳教育コースを急速に拡充しようとする場合、こうしたことが起きがちである。翻訳コンピテンスを教える現場での具体的な方法に結びつけて共有することが、翻訳教育の質の改善には重要である。

「how」の問いと「what」の問いを結びつけるためには二つのアプローチがある。第一は、先端的な実践を行っている現場における「how」を捉え、それを「what」に結びつけるボトムアップのアプローチである。第二は、「what」つまり「翻訳コンピテンスとは何か」を整理してそこにおけるコンピテンス把握の具体性(あるいはその欠如)を認識し、コンピテンスの各構成要素を分解しつつ、要素ごとにコンピテンスの内実を授業実践の現場で適用可能なレベルまで具体化していく、トップダウンのアプローチである。

ここでは、後者のアプローチを採用し、翻訳コンピテンスという概念の歴史的経緯・変遷および PACTE、EMT2017 など代表的な翻訳コンピテンスモデルに焦点を当てて関連研究をレビューすることで、これまでの研究で翻訳コンピテンスがどのレベルまで明示的に記述されていたのかを明らかにする。この知見を共有することは、実践のレベルで共有できるコンピテンスに対応した教育方法を具体的に展開するための一つの手がかりとなるはずである。

#### 【参考文献】

PACTE GROUP. (2003). Building a Translation Competence Model. In Fabio Alves (Ed.), *Triangulating Translation. Benjamins Translation Library*, 45. (pp. 43-68) Amsterdam: John Benjamins.

影浦峡, M. Thomas, A. Hartley, 内山将夫. (2016) 「みんなの翻訳実習における『足場』と翻訳力・翻訳

者力～みんなの翻訳第 6 報～」『言語処理学会第 22 回年次大会発表論文集』, 857-860.